新制大日本讀本

巻八

3759
Fu10
資料室

42548
教科書文庫
4
810
44-1933
200030
2105

昭和六年十一月九日中學校國語漢文科用
昭和八年七月六日實業學校國語科用
文部省檢定濟

文學博士 藤村作編

新制大日本讀本

東京 大日本圖書株式會社

資料室
375.9
Fu10

平重盛　福田惠一筆　二四　小松内府

廣島大學圖書之印

廣島大學
教
40285
圖書

新制大日本讀本　卷八

目次

一　昭和日本の目標　藤村作　一
二　大御歌　北原白秋　八
三　百蟲譜（うづら衣）　一四
四　秋の力　綱島梁川　一九
五　さやけき御光（詩）　正富汪洋　二二
六　紫宸殿の御儀（東京朝日新聞に據る）　二四
七　松島と象潟（奥の細道）　三六
八　旅に病む　沼波瓊音　三九

九　浦の苫屋（和歌）　（新古今和歌集）　四四
一〇　西郷南洲（詩）　藤村作　四六
一一　日野山の奥　（方丈記）　四九
一二　日本思想の特色　鶴見祐輔　五五
一三　鉢木　（謡曲）　六三
一四　建國の精神　永田秀次郎　八〇
一五　國際聯盟　新渡戸稲造　八五
一六　初時雨（俳句）　九三
一七　芳流閣上の血戰　（南總里見八犬傳）　九五
一八　梅花の清香　上田萬年　一〇二
一九　西風　長塚節　一〇四

二〇　柑子の木　（徒然草）　一一四
一　柑子の木　一一四
二　同じ心ならむ人　一一五
三　虚言　一一六
四　僞りても賢を學べ　一一七
五　能をつかむとする人　一一九
六　一道にたづさはる人　一一九
二一　徒然草につきて　新村出　一二一
二二　小松内府　（平家物語）　一二五
二三　小野の雪　（伊勢物語）　一三七
二四　東海道五十三次と廣重　小島烏水　一四〇

二五　尾形了齋覺え書　芥川龍之介　一四六

東京帝國大學圖書之印

昨年秋昭和三年十一月。

一　昭和日本の目標

藤村作

余は昨年秋に擧げさせられた御大禮に際して、大に期待してゐたものがあつたが、それが實現されなかつたことを千秋の恨事としてをる。

明治維新後の先輩の先見と努力は今日の新日本を建設した。今日の新日本といふのは、在來の東洋の文化の上に立つた日本に、西洋の文化を輸入し、在來の東洋精神の上に立つた日本に、西洋精神を採り入れて出來たものである。明治・大正の六十年間は、全くこの新日本の建設の爲に存したといつてもよからう。實際この六十年間は西洋文化・西洋精神の摸倣・輸入・理解・消化に費されたのである。この方針は決して誤つたものではなかつた。而してこの間に於ける先輩の努力は決して少いものでは

なかつた。さうして僅かに六十年の間に、西洋諸國が多くの年月を費して成就し得たものを學び取り、輸入し盡くすに至つたのである。物質文化・科學文化の點では、本家の西洋諸國にも、今日では最早多く遜色を見ないまでに進んだのである。それであるから、明治・大正時代を概觀するならば、西洋文化の輸入・摸倣の時代といつても決して過謬ではないと思ふ。明治天皇の維新の始の五箇條の御誓文にも明かに知識を世界に求むることを仰せになつてゐるやうに、明治・大正の國民は皆一齊に西洋文化の輸入、西洋精神の摸倣を以てその生活の信條として來た。國民全體がこれを共同の目標として、進行を共にしたればこそ、明治・大正時代の大成功は來たのである。

然るにここに御代は變つて昭和となつた。昭和の日本もやはり依然として明治・大正の日本で可なりであらうか。昭和の

丸の内（その一）

國是は、明治・大正の國是でよいのであらうか。私の見る所では、世界に國を成すものは、皆他の長所を採ることを一日たりとも怠つてはならない。殊に後れて西洋文化を學び得た我々新日本國民は將來といへども決して西洋文化の輸入摸倣を忽にしてはならないが、併し最早その輸入摸倣を以て第一目標とすべき時代は過ぎ去つた。我々昭和の國民はここに新たなる共同の目標を選定すべき立場に在ると思ふ。

國民が共同の理想を掲げ、共同の目標に向つて進んでゐる時代は、眞にその國運隆盛の時代である。若し國民がこの共同の理想・目標を失うた時は、國家は最も困難の時代にゐることを覺悟せねばならない。思ふに我が昭和の今日は、最早明治・大正時代の理想・目標を以て滿足し得なくなつたのである。西洋の摸倣のみでは滿足しきれなくなつたのである。故に一國の政治を握るものは、この點に心を致して、ここに共同の理想の光を掲げ、共同の目標をはつきりと認めさせることを先づ以て、今上陛下の御代の初に努めなければならないと思ふ。これが爲には御大禮は又と得難い好機會であつた。昭代一遇の好機會であつたのである。かういふよい機會を捕へなければ、これを八千萬國民の靈にはつきりと深く彫り附けることは困難である。一遇の好機を逸し去つたのは殘念の事をしたものである。

丸の内（その二）

然らば昭和時代の新國是といふべき、昭和國民の進路に見つむべき共同の目標といふのは何であらう。是を求めることは決して困難の事ではない。又骨折つて探出すべきものならば、それは容易に國民共同の目標となり得べきものではない。私の見る所では、この目標は決して、これを骨折つて探すまでもなく、極めて平凡なものとして手近い所に在る。否、平凡なればこそ、當然として國民誰しもに承認され、又手近に在ればこそ、誰が見出したといふこともなく、誰しもが共鳴し得るのである。その目標

といふのは、既に今上陛下が朝見式後の勅語の中に仰せられてゐる「摸擬を戒め創造を勗め」ることである。そして余はこれこそは、我々昭和國民が、性の如何に拘らず、職務の如何を問はず、悉くこれを體して進むべき目標であり、理想であると思ふ。

即ち、政治・經濟・交通・産業・學術・教育その他萬般の生活の上で、最早西洋の摸倣ばかりすることを戒めて、日本民族の獨創を以て日本文化を創造することに勗めることを、八千萬國民の共同の目標として、一致して進むことを最も必要とするのである。

併し我々日本人の獨創の文化を創造するといつても、もとより既に世に存するものを基礎として、その上に建設するより外に行くべき途はあるまい。全くないものから造り出すことは到底出來ないことである。既に在る文化の上に新しいものを築くことならば、それは我々の努力に依つて固より成し得べきである。詳しくいへば、世界に存する二大文化は、東洋文化と西洋文化で、其の外にはないのであるから、此の二文化の基礎の上に日本文化を建設する外、道はないと思ふのである。

さて我々は既に千餘年の歳月を經て東洋文化を消化して來、その粹を集めて所有してゐるものである。そして又同時に最近六十餘年の努力で西洋文化をも理解して、世界のあらゆる有色人種の中で、最もよく西洋文化を知る所の國民となつたのである。斯くして我々は、世界の二大文化を融合・調和し、統一するに最も有利な立場に在るものである。

翻つて我が國民性を顧み、我々の祖先が支那・印度の文化を輸入摸倣しつゝ進んで來た跡を見ると、彼等は決して他人の摸倣に止り、輸入に滿足してゐない。輸入し摸倣したものの上に日本人の息をかけて、他國の文化を改造し、これを我の有にしてし

まつてゐる。儒教・佛教の如きにしても、日本の儒教、日本の佛教と化してゐる。この歴史的事實に徴して、將來を考ふれば、我々は東西二大文化を融合・調和し、統一して、その上に日本特殊な文化を建設することを成し遂げ得ない國民ではないと思ふ。我我が摸倣を戒め創造を勗めて、東西二大文化の融合・調和より進んで、日本文化の創造を共同の目標とせよといふのも、決して愚かな强がり、誇大妄想の類ではない。爲政家の採つて以て國是とすべきものであり、國民教育家の教育の理想・目標とすべきものであると信ずる。

二　大御歌

北原白秋

明治天皇は現神としての大自覺に立たせられた。此の神ながらの道に立ち、まことに一大聖主として萬民の崇仰を受けさ

北原白秋
詩人。名は隆吉。明治十八年一月、福岡縣に生れた。

せられた。その御製を拜するにまことに王者の御風格が大御心を通じて、蒼穹のごとく、日天のごとく、十方四海に光耀しわたらせられる。

歌柄といふ點から見れば、あらゆる古今の名歌人も、大帝の御前には鞠躬如たるものがある。帝王と凡下とはおのづからにして違ふ。これは天意であつて、如何ともなすすべはない。

庭の面に
やどる火の
つらねたるかな

かぎりなくかけ連ねたる火のうつるも涼しにはのいけ水

明治天皇宸筆

宸筆
庭の木々にともし火をかけつらねたるをみてかぎりなくかけ連ねたるともし火のうつるも涼しにはのいけ水

あさみどり澄み渡りたる大空の廣きをおのが心ともがな。

御製は桂園派の歌調にして、しかもその御歌所調を遙に超越しておはせられる。ある歌人が萬葉調でおはせられぬと云ふ點について遺憾の意を表してゐたが、萬葉調ならぬ點について

桂園派
香川景樹の創めた歌風をさす。

こそ御製の御製たるところではないか。何となれば大帝の御製は既に大帝の御風格そのものであつて、桂園調とか萬葉調とかを以て批判し奉るべきで無い。形式以上の大稜威がそのまま帝王調として流露し光被して遍き故に、私ごときもひたすらに景仰し奉る所以である。

眞の王道こそ大帝の立たせたまうた絶對無二の天の道であつた。現神としての御自覺そのものが既に一の宗教であらせられた。御製を一々拜誦するに、その殆どすべてが、皇祖皇宗を崇め、國を思ひ、民を慈み、四海の和平を希ひ、異民愛撫の御聲ならぬはない。我が國民の當に常に禮拜しまつるところである。

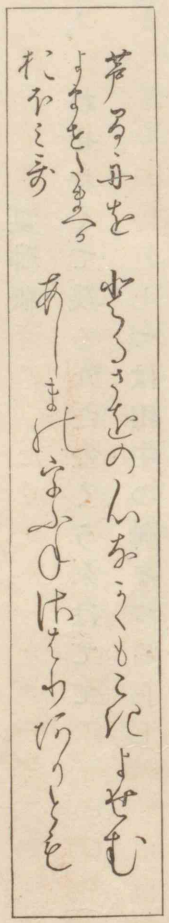
人たるの道、子たるの道、言の葉の道、あくまでも實に卽いて御詠歌遊ばされた。その中には教訓の教訓、道歌の道歌として、純粹の藝術外の見地から拜せらるゝ御製も少くないが、世の教育

家・宗教家・道學家達も、飜つて御製の純眞なる御風格をも、その各自の道の爲にする牽强附會の冒瀆があつてはならぬ。何となれば大帝の御製は理趣の爲の理趣でなく、一に王者としてのさながらの御詠歎であらせられるからである。

人口に膾炙してゐる御製以外の御製について、大帝の御一面

御筆蹟
蘆間舟をよませたまへるおほみ歌
とるさをの心なかくもこきよせむあしまのをふねさはりありとも

御製
昭憲皇太后御筆



についてこそ、ほとゝぎす私は人としての大帝を更めて思慕しまつるものである。誰人もまだそこに言及したものが無ささうに思はれる故に、敢へて茲に其の種の御製の二三を謹抄して國民の拜誦を希ふのである。

庭菊

この秋もところどころにきくの花
うゑてたのしむ九重のには

故郷萩

ふるさととなりし都は萩の戸の
花のさかりもさびしかるらむ

夏神祇

わせおくて殘るかたなくうゑはてて
しづは田中の神まつるらし

里

うつせみの代々木の里はしづかにて
都のほかのこゝちこそすれ

子

思ふことおもふがまゝに言ひいづる
をさな心やまことなるらむ

山

旅にいでてまづうれしきは都にて
見なれぬ山にむかふなりけり

田家雨

軒あさきしづがふせやは降る雨も
たゝみのうへにうちしぶくらむ

良寛

江戸時代の僧。俗名山本榮藏。越後出雲崎の人。天保二年正月歿した。年七十四。

何等の滯りもあらせられぬ。その思無邪は天の思無邪である。良寛の歌はいいと云ふ。然し良寛以上に大帝の御製は眞率で無心であらせられる。良寛は天成の童心者であつたであらう。然しかの思無邪の境涯は禪家としての修道と忍苦とから更に深められて、始めて幼子の心に還つたものにちがひない。

大帝は抑からそのままであらせられる。禪家の悟入やそれに附き纏ふ厭みが些もあらせられぬ。この純眞無垢こそは天意である。良寛の歌を渴仰する人々にして、良寛以上の大帝の御製ある事を恭禮しまつらないのは不思議である。

所謂太古にして太新、滔々乎として天の如しとは、まことに聖帝明治天皇の大御心であるものを。（季節の窓）

三　百蟲譜

蝶の花に飛びかひたる、やさしき物の限りなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠にくるしむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ莊周が夢もこの物には託しけめ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目覺したれば、この物の事更にも謗り難し。蟬はただ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やや日ざかりに鳴きさかる頃は人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも、初蛙ともいふ事をきかず。この者ばかり初蟬といはるゝこそ大いなる手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えず。」とこのものの上は、翁の一句に盡きたりといふべし。

螢は比ぶべきものもなく景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇はただこの者の爲にやとまでぞ覺ゆる。然るに貧の學者にとられて、油火の代りにせられたるはこの者の本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは殊の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく頃ならむ。つくゝぼうしといふ蟬は、つくし

戀ひしといふなり。筑紫の人の旅に死してこのものになりたりと、世の諺にいへりけり。あはれ蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

横井也有

蜘蛛は巧に網を結んで、ひそまつて物を害せむとす。もろこしのむかしには退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていとにくし。古代朝敵の初として、賴光をさへおびやかしたるいとおそろし。さはいへ、廢宅の荒れたる軒に蟬の羽などかけ捨てたるは、いさゝかあはれ添ふる折もあらむか。かれはかひがひしく巢作りてこそあれ、東海道にちりぼひたる宿なし者をば、くもとはいかでいふやらむ。

槐安の都
異聞錄に出てゐる傳說に、淳于棼が宅の古槐樹の下に眠つて、夢に大槐安國に行つた。覺めて見ると、樹下に蟻穴があつた。その中を尋ねると、夢に見た樣な城郭、殿堂があつたといふ話がある。

蠶の生涯は世の爲に終り、火とり蟲はたがために身をこがすや。蜉蝣ははかなきためしにひかれ蓼くふ蟲は不物ずきの誘となれり。さは俳諧するものを、俳諧せぬ人のかくいふ折もあるべし。

おなじ實の名によばれて、玉蟲はやさしく、こがね蟲はいやし。蟻は明暮にいそがしく、世の營に隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安き事を得む。さるもたよりあしきかたに穴を營みて、千丈の隄を崩すべからず。

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。狗の齒に嚙まるゝ蚤はたまゝにして、猿の手にさぐらるゝ虱は逃るゝこと難かるべし。

蝸牛は只水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらむ。家も

ちたれども、行く先々をおひ歩くは、水雲の安きにも似ず。

蛇・蚯蚓の足なくても歩むべくば、蜈蚣をさむしの數多きは不用の事なり。

蟷螂の痩せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人の上にもこのたぐひはあるべし。

蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。ただ原・吉原を駕にのりて、富士を眺めゆく人には似たり。

促織・鈴蟲・轡蟲はその音の似たるを以て名によばる。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名を附きたるならむ。毛生ひむくつけき蟲にもおなじ名ありて、松を枯らし、人にうとまる。一つ在處に二人の八兵衛ありて、一人は後生をねがひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。

蚊は憎むべき限りながら、さすがに卯月の頃、端居めづらしき夕、

始めてほのかに聞きたらむ、又は長月の頃力なく殘りたるは寂しきかたもあり。蚊帳釣りたる家のさま、蚊遣火焚く里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の隙なかりけむ。（うづら衣）

四　秋の力

綱島梁川

「あれこれをあつめて霞む春の朧」を人生の夢とも見ば、秋は直ちにこれ覺醒なり、事實なり。蔦紅葉の中より露はれ出づる節くれだてる樹身、枯芝生の底より躍り出づる偃蹇たる雲根、何れか秋は人に迫る事實たらざる。

中にも秋の力を最も強く瞻かに言出づるものは黄柚なり、赤柿なり。一美術家語りて曰く、「吾嘗て終日秋を郊外に探りて秋に會はず、歸路會〻夕空鮮かに生り出でたる赤き柿の實の累々た

うづら衣
横井也有の著。十四卷。著者一生の俳文を收めたもの。

綱島梁川
明治の思想家。名は榮一郎、備中の人。明治四十年歿。年三十五。

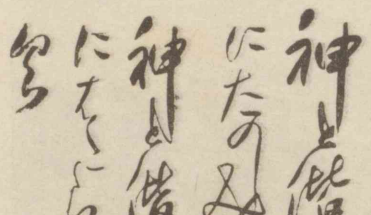
るを見て、始めて秋ここにありと叫びき」と。げにも秋の姿をさながらに具象にして描き出せるものありとせば、そは碧落の空に躍如として生り出でたる赤柿を措きてはまたとあらじ。秋は實に此の累々たる赤柿に其の全幅の表現を得たる趣あるに非ずや。その昔、蕪村・抱一などの畫家が寥々たる此の一物に大膽なる落想をこめて、一幅の秋のこゝろを勁く、隈なく淋漓揮灑し出せる詩眼、流石に凡にはあらざりけり。

綱島梁川

見よ、秋の潭に淵默の智あり、秋の空に剛明の象あり。月は清輝を帶び、星に聲あり。落葉にうづもるゝ枯井の水、猶鬚眉を鑑すべく、夢を歌ふ滿園の蟲しぐれ、人の深省を誘ふ。空際きはやかに走る波濤の山、極目鮮かにくね

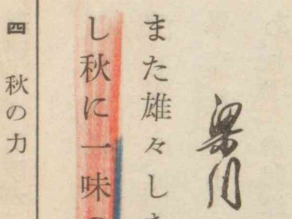
筆蹟
神と偕にたのしみ神と偕にはたらく　梁川

る一河の帶、樹間の聲に錚々として勁き、天籟・地籟の砰湃として厲しき、あはれ秋の萬象、何物かすべてこれ透明・照徹・剛克・雄健の一氣を以て貫かざる、何物かすべてこれ哲人の雄姿、道士の風岸を以て人に迫らざる。秋は夢に非ずして事實なり。人は秋に立つて、直ちに事實と面相接するなり。



綱島梁川筆蹟

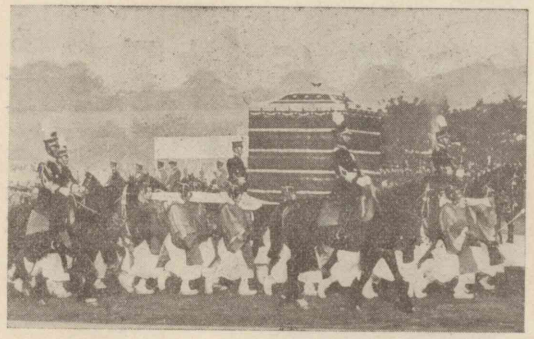
秋は何等の天文・地采の形式を借らざる裸體のまゝなる思想なり。そは如々なり、故に明瑩なり、澄徹なり、而して又充實なり、豐贍なり。春草の紗夏木の衣、すべて名殘なく脫ぎすてて、あらはなる葛蘿の筋、樹幹の骨、健くも



また雄々しき丈夫神の面影はげに秋にこそふさはしけれ。若し秋に一味の文采ありとせば、白蘋・紅蓼の裳裾、蘆花・淺水の帶、桔

梗刈萱尾花が波の袂も輕き姿なるべし。あはれ其の澹如たる涼しさは、彼の哲人・道士の婆娑たる一衣の高風にも似たるかな。畢竟秋の力は其の衣にあらずして赤裸々の事實にあり、思想にあり。（病間錄）

正富汪洋
文學者。名は由太郎。明治十四年四月、岡山縣に生れた。

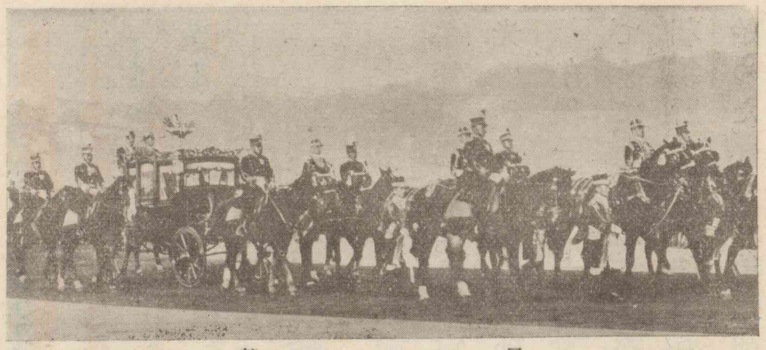


賢所

五　さやけき御光

正富汪洋

新高知らす　現人神は、
輝き給ふ　高御座にぞ。
尊き極み。
さやけきみ光　さやけき御光、
あまねきみ光　あまねき御光。



鳳輦

げに高光る　日の大稜威、
物みな慕ひ　ものみな懷く、
聖の帝王と。
いつくし日の影、　いつくし日のかげ。
けだかし日のかげ、　けだかし日の影。
なほつとめでや　この大御代に、
御旨をうけて　御光うけて、
世界の幸に。
むつまじ國民、　むつまじ國民。
勇まし國民、　勇まし國民。
彌榮昇る　御勢を

天地すべて
いみじき極み。
あかるき大典、
うれしき大典、

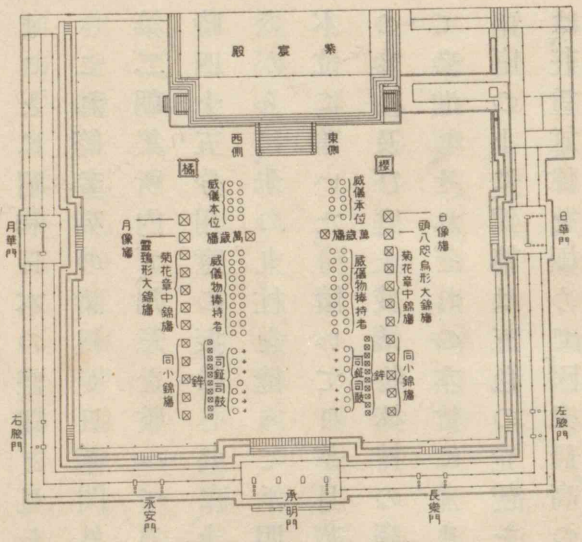
祝ぎまつる日ぞ。
あかるき大典。
うれしき大典。（御大典奉祝國民歌）

十日
昭和三年十一月。

六　紫宸殿の御儀

十日午前、賢所大前の大儀終つて、參列諸員は朝集所において午餐を賜つた。紫宸殿の南庭にはただ錦旛のゆらめく美しい光のみが、白い白川砂の上に映ゆるばかりであつた。

午後一時二十分――儀仗の陸海軍兩部隊が肅々として進んで來て、建禮門と建春門の外に整列した。午後一時五十分――朝集所では式部官の誘導によつて靜肅に參列諸員は列を作り始めた。まづ第二朝集所の高等官一等以下二千餘名の人々から、順次式場に進む。高官連の大禮裝の間には、夫人達の古代裝束の袿に緋の袴の優美な姿が交つて、光の波が連續する。この諸員の内には民間功勞者や朝鮮貴族總代の一團の燕尾服姿も見えた。續いて、第一朝集所の動一等以上の諸員が、同じく門外に列立した。最上席の東郷老元帥の感激に滿ちた姿を始め、倉富樞府議長・上原元帥・各國務大臣・山梨朝鮮總督・首相前官禮遇者・大臣前官禮遇者・平沼樞府副議長以下各顧問官・陸海軍大將・松井松平兩大使・川村臺灣總督等



紫宸殿の御儀指圖

の親任官・德川、元田貴衆兩院議長等、一代の重臣、巨星を網羅して、まことに昭和日本の盛觀と見られた。

これ等參列の諸員が日華門外の白砂を埋めて進んでゐる頃、第二朝集所内で、用意を整へてゐた庭上參役の人々三十人は、一時四十五分用意の振鈴と共に、土佐繪に見る平安武人の面影さながらに、朱の丸柱を縫うて承明門より參入し、それぞれ衞門の本位に着いた。　續いて日華・月華の東西兩御門からは、司鉦・司鼓の參役及び庭上威儀物捧持の高等官四十名が、優美な姿を列ねて參進し、それぞれの本位に着きをはつた。　見渡せば、秋淸澄の南庭の上に、錦旛は五色の光芒を空に投げ、古代裝束の威儀の列は、莊重雄偉を極めて、國家最高の奉祝の氣が溢れてゐた。

庭上の儀容は全く整うた。　紫宸殿の内外は森嚴の氣に滿ちた時、靜寂境に滲み徹る樣な鉦の音が一聲カーンと鳴り響いた。

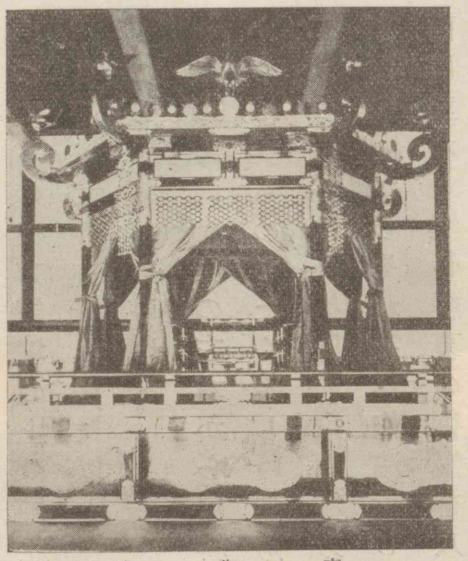
續いて鼓を擊つ音が力强く之に應じた。　また響く鉦、續いて鼓、鉦の音、鼓のとどろき――打つ事各三下、承明門に近く末座に控へた司鉦・司鼓の合圖である。　それと同時に動一等以上の大官・重臣は各夫人と共に殿上へ、高等官一等以下各總代・代表に至る二千の諸員は、東西兩廂又は軒廊へ進み、最前列より順次に後列にそれぞれの本位に就いた。　締盟列國を代表して盛典に參列したドイツ大使ゾルフ博士以下列國の使節は、夫人同伴で西の階から殿上に上り、殿の向つて左、高御座に近く、御壁代の外に列立した。　その後方および東廂に列立せるは勳一等以上大勳位に至る人々とその夫人連の一團である。　やがて紫宸殿上の丸柱を縫うて、黑袍・束帶帶劍の人々が、西方から靜々と出で來り、南廂西手まで參進してそこで止まつた――式部官を從へた式部長官伊藤博邦公、同次長渡邊直達氏である。　その後から同じ束

帶で參進してその上席についたのは大禮使長官近衞文麿公、同次官內閣書記官長鳩山一郎、同宮內次官關屋貞三郎兩氏、並に大禮使御用掛平沼樞府副議長、伊東同顧問官である。間もなく內閣總理大臣田中義一男が參進して來た。今日ぞ晴れの御儀に顏の色も一層照り輝いて、あの偉大な體軀に垂纓の冠、黑袍・束帶・大劍を腰に、笏を右手に、同じ束帶の宮內大臣一木喜德郎氏と並んで進み、近衞長官の上班についた。

仰げば、靑簾越しに輝く黑漆金裝の高御座に近く、その壇下左方には皇弟秩父宮・高松宮兩殿下並に大禮使總裁閑院元帥宮・同若宮・伏見宮・同若宮・久邇宮・同若宮・梨本宮・朝香宮・賀陽宮・東久邇宮・久邇宮多嘉王・李王各殿下、何れも雲鶴紋の御黑袍・御束帶・御帶劍の御姿尊く、御袖を連ねて御參進、本位に著かせられた。

この時南廂橘の繁みの上に見えた緋袍・束帶の式部官加藤內

藏助氏は聲も嚴かに警蹕を唱へた。「ケーヒー」と底力のあるこの警めの一聲に今し皇宮大奧御常御殿の方より、聖上陛下の出御あらせらるゝを傳ふるもの、警蹕の聲は遙に承明門の邊までも聞えた。殿上・庭上更にこれを廻る軒廊の諸員も形を正して鉦の一聲に起立した。息づまる樣な莊重の雰圍氣である。



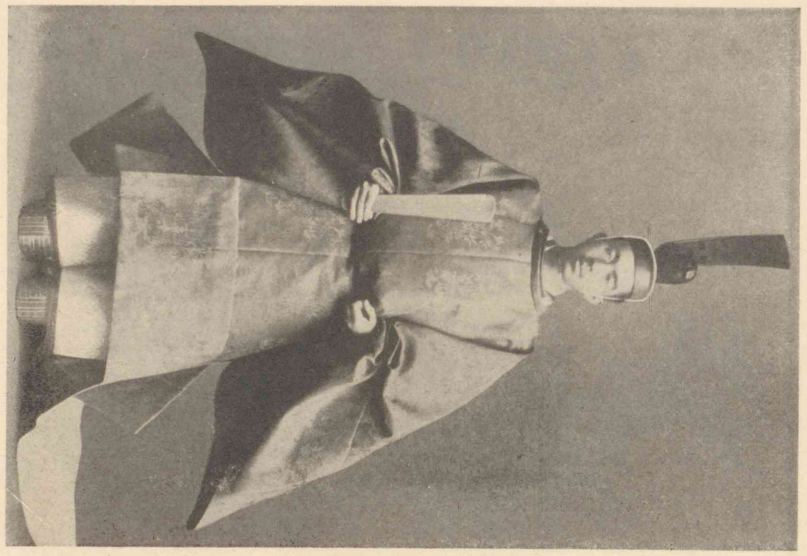
高御座

天皇陛下には侍從の御先導により、劍璽捧持の侍從、內大臣牧野伸顯子・珍田侍從長・奈良侍從武官長以下侍從・侍從武官を隨へさせられ、兩面錦の御敷物も美しい紫宸殿上に出御、玉步もいと御嚴かに北階より天津日嗣

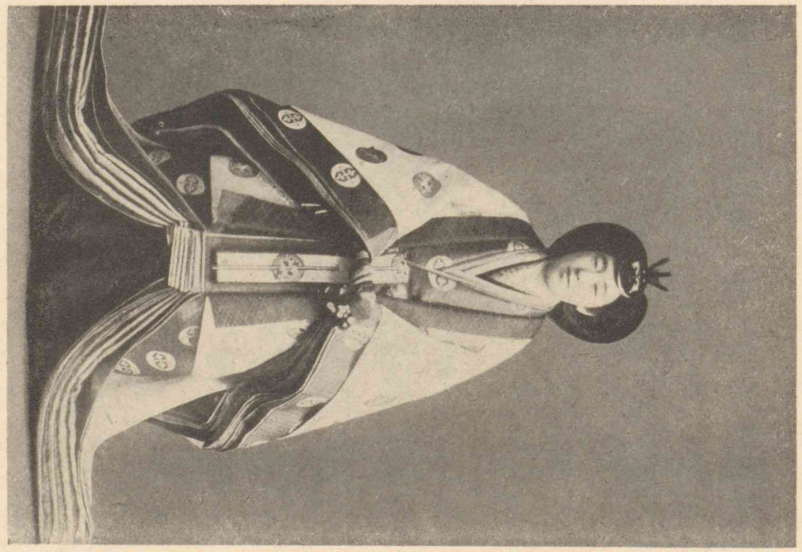
の高御座に昇御遊ばされた。劍璽は玉座の側、螺鈿案に奉安され、珍田侍從長以下侍從、奈良侍從武官長以下侍從武官は高御座の後方左右に控へ、牧野内大臣は恐る恐る階を上つて御帳の外向つて右の後方繼壇の上に侍立した。續いて、皇后陛下には河井皇后宮大夫、竹屋女官長以下各女官を隨へさせられて、御帳臺上に出御あらせられた。

この時高御座の左右からは緋袍姿の侍從二人、御帳臺の左右からは姿もめでたく美しい袿袴姿の女官二人、靜々と進み出た。二人の侍從は高御座の東西雙方の階から、二人の女官は御帳臺東西の階から、それぞれ作法正しく上つて、高御座と御帳臺の前面に垂れた深紫緋裏の御帳を八文字にかゝげた。

天皇・皇后兩陛下の御姿の美しく神々しさ、仰げば黃金の大鳳は殿上高く翼を張り、御神位を語る大小の御鏡、五彩の寶玉、燦々

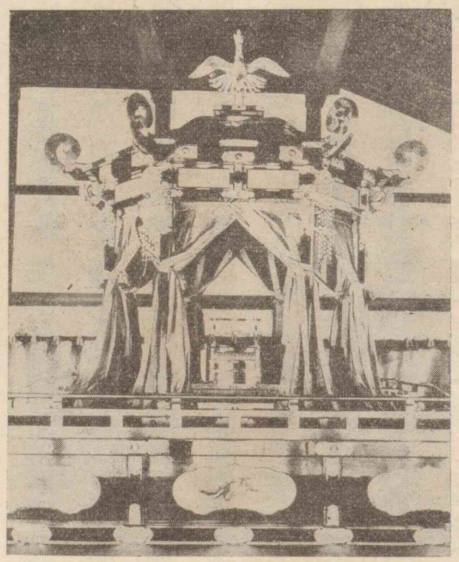


天皇陛下



皇后陛下

として光は色と相映じ、光芒殿内に滿つる天津日嗣の高御座に、蠟色螺鈿、御紋章散らしの御椅子を御背にして、青貝螺鈿の劍璽案を御側に、大八洲しろし召し給ふ天皇陛下には、畏くも双の御手に御笏を持たせられ立御あらせられた。立纓の御冠に黄櫨染――桐竹に鳳凰・麒麟の御紋を織りだした御袍――に窠霰の御紋ある白浮織物の御表袴、紅の大口を召し、繧繝錦の御挿鞋を召させられた尊くも崇き御英姿、燦たる高御座の中に今し出御あらせられた。あゝ何といふ感激の刹那であらう。



御帳臺

更に御帳臺を仰げば、溢るゝばかりの慈愛の御眼ざしは、自らなる高貴の御光尊く、玉顔ほのかに薄紅を點じさせ給ひ、黄金の御釵子、綠滴るばかりの御髮、殊の外輝かしく拜された。御五衣のめでたさ、綠地に藤の丸を白の浮織にした御表衣、白浮織綾地に鳳凰の丸を綠と紅梅色で織出した御唐衣、白練緯三重襷の御裳に緋の御袴を召し、尾長鳥を描いた御檜扇をとらせられた御姿、ここにわが日の本の皇后陛下を、御帳臺の上に仰ぎまつるのであつた。

その壇下前面東方には御十二方の各妃の宮方が、いづれも御五衣・御唐衣・御裳の御姿で御列立遊ばされた。その最上位秩父宮妃勢津子殿下の殊の外お若々しきお姿を始め、十二單の御裝束端然として並立たせ給ふ御十二方、あたかも繪卷の中の古へを現に見る如き御美しさである。諸員は鉦の一聲にて、ここに

最も意義深き最敬禮をば高御座・御帳臺上の兩陛下に捧げ奉つた。竹の園生のかかる御榮え、兩陛下並び臨ませ給ふ御卽位の禮は、實に日本建國の歷史三千年、いまだ曾て一度だにも拜せざる御盛事である。

今し殿上には皇族各殿下を始め、雲の如き重臣・顯官等に圍繞せられ給ひ天壤無窮の寶祚、天津高御座に昇御あらせられた天皇陛下並に御帳臺上の皇后陛下を仰ぎ奉り、三千の參列諸員威儀を正して、肅然たる折柄、南廂に控へた田中首相は靜かに御前に拜禮して束帶の姿重々しく西階を下つて、左へ右近の橘の側を、歩一歩嚴肅に進み、殿の正面南階の下に高御座に向つて直立した。

鉦の音は庭上に冴えて諸員一齊に敬禮を行ふ。この時陛下には畏くも立御あり、御笏を侍從に授け給ひて、牧野内府の捧ぐ

る勅語書を執らせられた。ここに我が天皇陛下には玉音殊の外莊重に御一世の大禮、大統御繼承の卽位禮勅語を下し賜はつたのである。朗々たる御聲は金鳳燦として紫帳に輝く高御座の御內から畏くも洩れ聞え來る。三千の諸員は肅として千代八千代かけて聖壽と皇國の御榮えを念ずる間に、勅語は終らせられた。鼓の響に一同直立、南庭上の田中首相はやがて正面南階の十八級を謹みに謹みて上り、繡帽額日像の下、南廂に立ち、謹嚴の聲恭しく全國民に代り壽詞を奏し奉つた。その聲は感激と光榮に高まつて、軒廊の隅々にまでも響きわたつた。終ると首相は南階の西側を恭しく下り、兩萬歲旛の錦燃ゆるが如きその眞中に北面して儼然と立つた。「天皇陛下萬歲」首相は束帶の全身を搖り動かして天にも徹れとばかり、熱誠至情の聲高く叫ぶ。殿上各宮殿下を始め奉り、庭上の參列諸員これに和し、意氣

昂然「萬歲」を唱へた。首相は更に「萬歲」と叫び、諸員又これに和し「萬歲」「萬歲」と首相の唱聲につれて三度唱和した。折から場外建禮・建春兩御門外儀仗の陸海軍軍樂隊は、嘹々「君が代」を吹奏し、同時に市民の高唱する「萬歲」の聲は波音の如く場內に響いて來た。今や八千萬の國民、大八洲の民草は此處紫宸殿の高御座を遙拜しつゝ、「陛下萬歲」を高唱してゐるのである。轟く百一發の禮砲・汽笛、撞き鳴らす梵鐘――全日本はこの日午後三時、日本人のみが知る最大の歡喜に搖り動いたのである。

三千の參列員は悉く自然と湧き出づる感激の涙を禁じ得ないやうに見えた。やがて首相は殿上の本位に復し、最敬禮中に高御座と御帳臺の御帳は垂れ下され、兩陛下には警蹕の聲嚴かに入御あらせられた。時に午後三時四分、我が日本の最大の御儀はかくて瑞祥大歡喜の內に終了した。（東京朝日新聞に據る）

七　松島と象潟

松　島

日既に午に近し。舟を借りて松島に渡る。其の間二里餘。

雄島の磯に着く。

抑ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭・西湖に恥ぢず。東南より海を入れて江の中三里、浙江の潮をたたふ。島々の數をつくして、欹つものは天を指し、伏すものは波に匍匐ふ。あるは二重にかさなり、三重にたたみて、左にわかれ、右につらなる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の綠こまやかに、枝葉汐風に吹きたわめられて、屈曲おのづからたゆたるが如し。其の景色窅然として美人の顏をよそふ。ちはやぶる神のむかし、大山つみのなせる業にや。造化の天工、

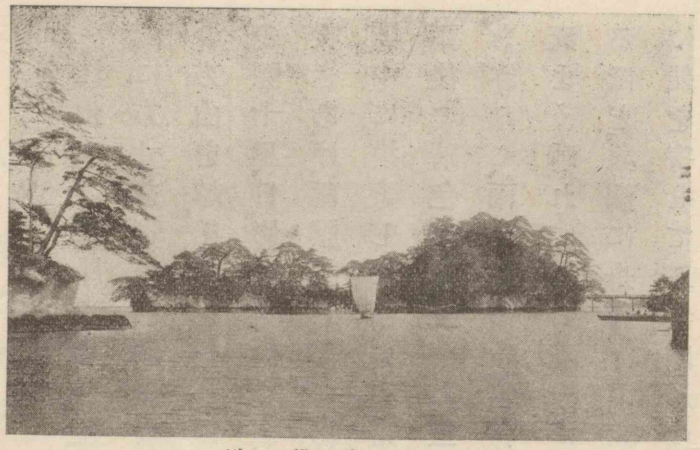
洞庭　支那湖南省北方の大湖。有名の勝地。

西湖　支那浙江省に在る湖。風景の美を以て有名である。

浙江　錢塘江。

大山つみ　大山津見神。山を掌る神。

雲の中に旅寐するこそ、あやしきまで妙なる心ちはせらるれ。



松　島（雄　島）

いづれの人か筆をふるひ、詞をつくさん。

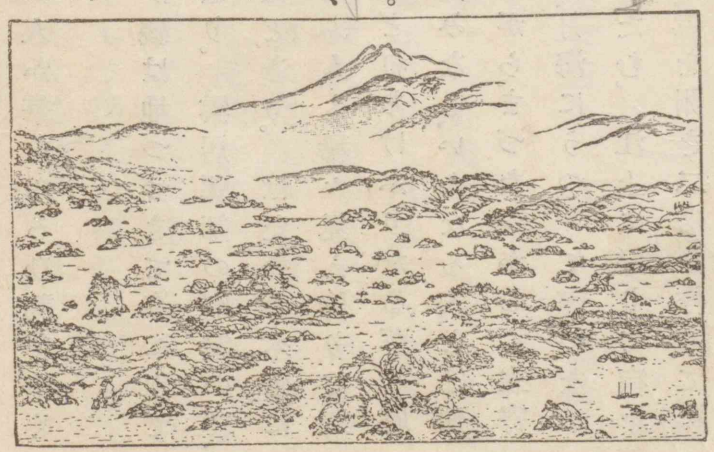
雄島が磯は地つづきて海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。はた松の木蔭に世をいとふ人も稀々見え侍りて、落穗・松笠など打ちけぶりたる草の庵閑かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、まづなつかしく立寄るほどに、月海にうつりて晝のながめ又あらたむ。江上に歸りて宿を求むれば、窓を開き二階を作りて、風

雲居禪師　希膺。瑞巖寺中興の僧。萬治二年寂。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす。　曾良

象潟

江山水陸の風光、數を盡くして、今象潟に方寸を責む。酒田の港より東北の方山を越え、磯を傳ひ、砂を踏みて、其の際十里、日影やゝ傾く頃、汐風眞砂を吹きあげ、雨朦朧として鳥海の山隱る。闇中に摸索して雨も亦奇なりとせば、雨後の晴色又頼もしと、蜑の苫屋に膝を容れて、雨の晴るゝを待つ。其の朝天よく晴れて朝日花やかにさし出づるほど、象潟に舟を浮ぶ。まづ能因島に船を寄せて、三年幽居の跡をとぶら



象潟
秋田縣羽後西南部の名勝地。

挿圖
象潟古圖。

雨も亦奇なり
水光瀲灩晴偏好。山色空濛雨亦奇。（蘇軾）

ひ、向ふの岸に船をあがれば、花の上漕ぐとよまれし櫻の老木西行法師の記念を殘す。江上に御陵あり、神功皇后の御陵といふ。寺を干滿珠寺といふ。此の寺の方丈に坐して、簾を捲けば風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさゝへ、其の影うつりて江にあり。西はむや〳〵の關路を限り、東に堤を築きて秋田に通ふ道遙に、海北に構へて、波打ち入るゝ所を汐越といふ。江の縱横一里ばかり、俤松島に通ひて、又異なり。松島は笑ふが如く、象潟は怨むが如し。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂を惱ますに似たり。

象潟や雨に西施が合歡の花。

汐越や鶴はぎ濡れて海涼し。

（奥の細道）

八　旅に病む

沼波瓊音

花の上漕ぐ
象潟の櫻は波にうづもれて花の上漕ぐ海人の釣り舟。（西行）

奥の細道
芭蕉が四十六歳の時。奥羽地方を旅行した紀行文。
芭蕉は本名を松尾宗房と云ひ江戸時代の俳人、伊賀の人、元祿七年歿、年五十一。

沼波瓊音
名は武夫、名古屋市の人、國文學者、昭和二年歿、年五十二。

九日の日は晴れて明けた。皆が介抱して、芭蕉の夜具も寢衣もさつぱりと新しいのに取換へさせた。その新しい夜具と寢衣は花屋の主人の厚意で整へてくれたものであつた。仁左衛門と云ふ人は、毎日見舞に裏座敷へ來ると云ふやうなことはしないで、母屋に居て何かと、芭蕉及び連衆の便宜を、陰になつて默つてして居ると云ふ人であつた。貸主が見舞に來ると云ふ事が一同の氣がねになることをよく心得て居る苦勞人であつた。

鼠色の丸頭巾、白いさわ〳〵とした絹の寢衣着て、けば〳〵しからぬ唐草模樣の、ふつくらと綿の多い絹夜具に寢た芭蕉の姿は、神々しく見えた。不淨の病とは云へ、病人のたしなみの宜いのと、世話の行屆くのとで些の惡臭も無く、ただ空炷の香が、炷かぬ折も、室に漂つて居るのみであつた。

着換は面倒であつたが、清爽の心持を芭蕉は嬉しく思つた。

「何處かで行倒れになる筈のわしが、こんな美しい褥の上で、しかも皆の深切な介抱を受けて死ぬとは、わしは思の外仕合せ者ぢやつた。――呑舟や、昨夜の句を皆に見て貰はうか」。

松尾芭蕉

まだ掃除やら何やらで、丁度皆が病室から次の間へかけて居たところであつた。昨夜御句が出來たと聞いて皆そこに坐つた。ただ丈草と去來が勝手の方へ行つたので、これも呼んで來た。

呑舟が、書いたのを去來に渡した。

去來は一禮して、心で一度讀んでみて、さて高聲に

「旅に病んで夢は枯野を駈けめぐる。」

と讀んだ。一同は各〻自ら心で再誦してみた。企てては成るべ

からざる作と誰も誰も感じた。そこには物狂ほしさ、凄さが溢れて居るが、しかも底に寂靜なる深い悲哀が流れて居る。一同は三度四度心で誦し反した。惟然は口に出して小聲で幾度も幾度も誦し反した。

「なほ駈けめぐる夢心とも、枯野をめぐる夢心ともして見たが、やはり夢は枯野をがよいやうに思ふが。」

「夢は枯野を駈けめぐる、これでございます、これでございます。まことに拜誦致せば誰も毛髮爲に動くの名章と存じまする。」と支考が感涙を泛べつゝいつた。

「さうかな。これは辭世ではない。辭世でないこともない。ただ病中の心を寫したまでぢや……思へば、生死の一大事を前に置きながら、如何に生涯好んだ風流とは云へ、是も妄執ぢや、妄執ぢや。……わしの妄執も、もはやこれ限りぢや……」

何とも云へぬ黑いものが、一同の心を蔽うて又過ぎた。

「妄執では決してございません。朝雲暮雨・山水・野鳥、日々の見るもの聞くもの、すべて御捨てなさらぬ。老師の心身は唯これ一切風雅でございまする。かやうな重病の床になほ且斯かる風神の名章をお唱へ遊ばす。まことに門葉の喜でございまする。他門の聞えでございまする。末代の龜鑑でございまする。」と去來は且泣き且いつた。

門葉の喜の爲や、他門の聞えの爲の御作ぢやないわと、惟然はむら〳〵となつたが、默つて、自ら感ずる所を深く感じて居た。

芭蕉はもうと〳〵として居た。時々ハツと目を見開くので、次郎兵衛が用を聞かうとすると、又うと〳〵と眠つた。芭蕉の目のまはりには何となう黝い色が浮いた。成るべく多人數病床に侍することにした。

この日はよく昏睡した。人々は高い聲を出すのを憚つた。さうして森として暮れて行つた。

（芭蕉の臨終）

九　浦の苫屋

藤原定家

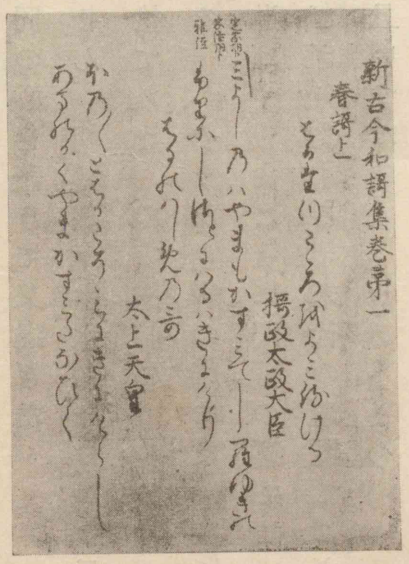
見わたせば花も紅葉もなかりけり、浦の苫屋の秋の夕暮。

駒とめて袖うちはらふかげもなし、佐野のわたりの雪の夕暮。

藤原家隆

志賀の浦や遠ざかりゆく浪間より、こほりて出づる月。

ありあけの月。



新古今和歌集

藤原定家
鎌倉時代初期に出た有名な歌人、俊成の子、新古今、新勅撰和歌集の撰者、仁治二年歿、年八十。

藤原家隆
鎌倉時代初期に出た歌人、定家と並び稱せられた、新古今和歌集の撰者、嘉禎二年歿、年八十。

鴉の海や月の光のうつろへば、浪の花にも秋は見えけり。

太上天皇

秋ふけぬなけや霜夜のきりぎりす、やゝかげ寒し蓬生の月。

奥山のおどろがしたもふみわけて、みちある世ぞと人に知せむ。

寂蓮法師

村雨のつゆもまだひぬ槇の葉にきりたちのぼる秋の夕暮。

和歌の浦を松の葉ごしにながむれば、こずゑによする海人の釣舟。

西行法師

おしなべてものをおもはぬ人にさへ、心をつくるあきのはつ風。

心なき身にもあはれは知られけり、しぎたつ澤の秋の夕暮。

太上天皇
人皇第八十二代後鳥羽天皇の御事、延應元年崩御、御壽六十。

寂蓮法師
俗名藤原定長、鎌倉時代初期の歌人。

西行法師
鎌倉時代の歌人、俗名佐藤義清、僧となり圓位と稱した。建久元年歿、年七十三。

式子内親王
後白河天皇の第二皇女。

新古今和歌集
鎌倉時代の和歌集。二十卷、後鳥羽院の院宣によつて通具・有家・定家・定隆・雅經等が元久二年撰進した。

一　ながむれば衣手すずし、久方の天の河原の秋の夕暮。

二　見るまゝに冬は來にけり、鴨の居る入り江のみぎは薄氷りつつ。

（新古今和歌集）

式子内親王

一〇　西郷南洲

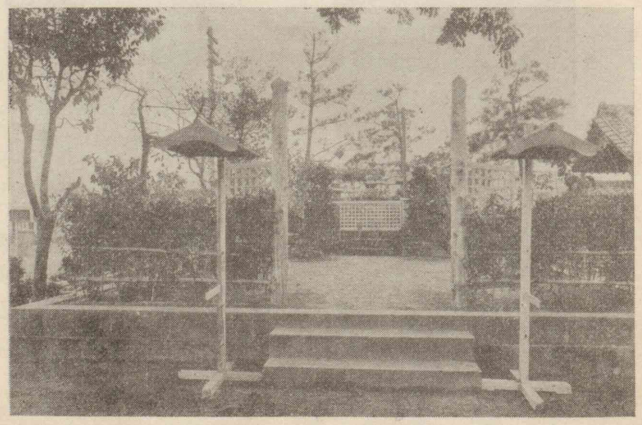
藤村作

安政五年の霜月なかば、
月影碎くる薩摩のせとの
波間に沈みし刎頸の友、
一人は死して大義に殉し、
くしくも君はよみがへり、
宏謨を翼けて素志を成しぬ。
哀れは盡きせず、懷往の詩。

相約投淵無後先　豈圖波上再生緣、
回頭十有餘年夢　空隔幽明哭墓前。

自ら危き使に死して、
國威の張るべき基を立つと
至誠をこめたる征韓の論、
破れし恨殘さぬ心、
再び世事を口にせず、
都督の大任辭して去りぬ。
逸情見るべし、村莊の詩。

我家松籟洗塵緣　滿耳清風身欲仙。



月照上人の墓

誤作京華名利客　此聲不聽已三年。

死所を求めて死所に遭はず、
笑つて殘骸子弟にゆるし、
賊の名負ひつゝ世を去りし君、
得喪毀譽のほだしを斷ちし、
あゝ、我が無我の英雄の
高風誰かは慕はざらん。
尊ぶべきかな、述懷の詩。

幾經辛酸志始堅　丈夫玉碎
愧甎全、
我家遺法人知否　不爲兒孫
買美田。

西郷隆盛終焉之地

二　日野山の奥

こゝに六十の露消えがたに及びて、更に末葉のやどりを結べることあり。いはば旅人の一夜の宿をつくり、老いたる蠶の繭をいとなむが如し。これを中頃のすみかになずらふれば、また百分が一にだにも及ばず。とかくいふほどに、齡は年々にかたぶき、住家は折々に狹し。その家のさま世の常ならず。廣さはわづかに方丈、高さは七尺が内なり。處を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居を組み、打覆を葺きて、繼目毎に掛けがねをかけたり。もし心に適はぬことあらば易く外に移さむが爲なり。その改め造る時、幾ばくの煩かある。積むところ僅かに二輛なり。車の力を報ゆる外は、さらに他の用途いらず。

いま日野山の奥に迹をかくして後、南に假の日がくしをさし

出して、竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚を作り、うちには西の垣に沿へて阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日を受けて眉間のひかりとす。かの帳の扉に、普賢ならびに不動の像を掛けたり。北の障子の上にちひさき棚をかまへて、黑き皮籠三四合を置く。すなはち和歌・管絃・往生要集ごときの抄物を入れたり。かたはらに箏・琵琶おの〳〵一張を立つ。いはゆる折箏・つぎ琵琶これなり。東にそへて蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、こゝに文机をいだせり。枕のかたにすびつあり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少地を占めて、あばらなる姫垣をかこひて

鴨長明

園とす。すなはちもろ〳〵の藥草を植ゑたり。假の庵のありさまかくのごとし。

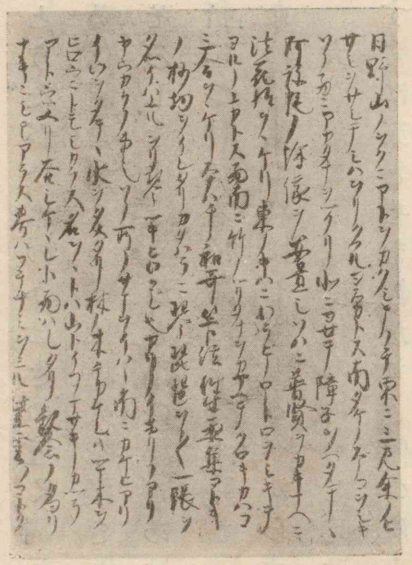
その處のさまをいはば、南に筧あり。岩をたゝみて水を溜めたり。林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら迹をうづめり。谷しげけれど、西は晴れたり。觀念のたより無きにしもあらず。春は藤浪を見る。紫雲のごとくして西の方ににほふ。夏は時鳥を聽く。かたらふごとに死出の山路をちぎる。秋は蜩の聲耳に滿てり。空蟬の世をかなしむかと聞ゆ。冬は雪をあはれむ。つもり消ゆるさま罪障に喩へつべし。

もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、ひとり居れば口業を修めつべし。かならず禁

戒を守るとしもなけれども、境界なければ何につけてか破らむ。もし迹のしら波に身を寄するあしたには、岡の屋に行きかふ船をながめて滿沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉をならす夕には、潯陽の江をおもひ遣りて源都督のながれをならふ。若しあまりの興ある時は、しば〳〵松のひびきに秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳をよろこばしめむとにもあらず。ひとりしらべ、ひとり詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

また麓に一つの柴の庵あり。すなはち山守が居る所なり。かしこに小童あり。時々來りてあひ訪ふ。若しつれづれなる時は、これを友として遊びあり く。かれは十六歳われは六十。その齢ことの外なれど、心をなぐさむることはこれおなじ。或はつばなを抜き、岩なしを採る。又ぬかごをもり、芹を摘む。或

はすそわの田居に至りて、落穂を拾ひてほぐみを作る。若し日うらゝかなれば、嶺に攀ぢのぼりて、はるかに故郷の空を望み、木幡山・伏見の里・鳥羽・羽束師を見る。勝地は主なければ、心をなぐさむるにさはりなし。あゆみわづらひなく、志遠くいたる時は、これより嶺つづき、炭山を越え、笠取を過ぎて、岩間にまうで、石山を拜む。もしは又粟津の原を分けて蟬丸の翁が迹をとぶらひ、田上川を渡りて猿丸太夫が墓をたづね、かへるさには、をりにつけつゝ櫻を狩り紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、かつは佛にたてまつり、かつは家苞にす。もし夜靜かなれば、



太福光寺本方丈記

窓の月に古人をしのび、猿の聲に袖をうるほす。草むらの螢は遠く眞木の島のかがり火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろ〳〵と鳴くを聞きても、父か母かとうたがひ、峯のかせきの近く馴れたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。或は埋火を搔きおこし老の寢覺の友とす。おそろしき山ならねど、梟の聲をあはれむにつけても、山中の景氣折につけて盡くることなし。況や深く思ひ、深く知れらむ人のためには、これにしも限るべからず。

大かたこの處に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今すでに五とせを經たり。假の庵もやゝ古屋となりて、軒には朽葉深く、土居に苔むせり。おのづから事のたよりに都を聞けば、この山に籠り居て後、やむごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。まして、數ならぬたぐひ、盡くしてこれを知るべからず。

方丈記　鴨長明の作。

鶴見祐輔　群馬縣の人。明治十八年生、著述家。

コロムビア大學　米國 Columbia 市にある。

度々の炎上に亡びたる家、又いくそばくぞ。ただ假の庵のみ、のどけくして恐なし。（方丈記）

三　日本思想の特色

鶴見祐輔

一昨年米國のコロムビア大學でした「現代日本」といふ講義に、日本思想大觀といつたやうな一章を設けて話してみた。その中に、私は日本民族の思想史を回顧して、五つの特色を數へた。その五つの特色を基礎として見て、始めて現代日本人の思想も理解せられ、また今後の日本人の思想的變化も想像せられるト思つたからである。それは大體次のやうなことである。

日本の思想史を繙（ひもと）く人の誰人も第一に感ずることは、日本人が外來思想を吸收することの急速なことである。應神の朝、儒教が百濟から來た時、欽明の朝、佛教がまた百濟から來た時、それ

ザヴィエル Francis Xavier スペインの人。（一五〇六―一五五二）宗教改革時代耶蘇會を組織し、後、日本に布教した。

アメリカンインディアン American Indian アメリカ在住の黒人。

から後奈良の朝、ザヴィエルが天主教を齎した時、德川の初代、宋や明の新しい儒教が日本に流入した時、而して明治初年の歐米文化の洪水の如く入つた時、これらの史實を振り返つて見ると、實に日本民族といふものが、外國新文化の攝取に敏捷な人間であることが解る。このために、或外國人は日本人を目して、摸倣國民で、獨創力のない國民であると言つてゐる。又日本人の中には外國文化の謳歌を日本人の恥辱であるとして、思想的鎖國をしなければならぬといふやうに言つて居る人もある。が、この外國文化の攝取癖は、日本民族發達の一大原因であつた。若しこれが無かつたら、日本民族はアメリカンインディアンのやうに亡びてをつたかも知れない。支那今日の衰頽の一因は、その排外的中華癖である。

然るに、日本民族は第二の特色を持つてゐる。外國新文化は、

一時ドッと洪水のやうに國内に瀰漫するが、四五十年經つと、必ずこれに對する鋭い反動が起つて來る。儒教も佛教も耶蘇教も、來た時は燎原の火のやうな勢で、日本全土にひろがつたけれど、四五十年たつて、これに對する激しい反動の起つて來たことは日本歴史を讀む人のよく知る處である。即ちそれは日本精神の反噬なのである。若しこれが逆であつて、外國文化の入らうとする時に激しい反動があつたり、又は入つて後四五十年して日本人が他愛もなく降參してしまふといふのであつたなら、日本に取つてはまことに不幸なことであつたと思ふ。ところが最初入るときには歡迎して、居着いてから、その新來思想を日本精神をもつて鍛冶しようとするのであつたから、日本に取つて結構なことであつた。

第三の特色は、日本人の知行一致癖である。我々日本人は高

遠複雜なる思辨哲學といふものを案出する頭腦が乏しい。我我は知識・思想をすぐ實行しようとする。この知行一致の癖があるために、外來の複雜な思想は、日本へ入ると頗る簡單なものになつてしまふ。大乘佛教の高遠な思想が日本へ來ると、まるで簡單なことになつてしまつた。獨逸の哲學者カイゼルリングの書いた「哲學者の旅行日記」といふ本は、一昨年米國の出版界を驚倒した人氣本であるが、この思想家が全世界を旅行したその觀察記のうちで、日本を論じてゐる各章は、實に暗示に富んだ文獻である。そのうちに彼は高野山詣での記事中に論じて、日本の佛教は支那の佛教と違つてゐる。寧ろ歐洲中世の僧院生活に似てゐると書いてゐる。私はこれは面白い觀察であると思ふ。同じ佛教が支那に在る時と、日本に來てからとまるで違ふのが面白いと思ふのである。私が日本倫理思想史を讀んで

痛切に感ずることは、例へば宋儒の理性哲學が日本へ渡つて來ると、まるで別物のやうに簡單になつたことである。

第四の特色は、調和癖である。私は日本人の生活と思想との一切を貫く根本的特色は、この調和癖であると思ふ。一部と全部との調和、思想と實行との調和を愛好し、さらに宇宙一切の現象のうちに莊嚴なる調和を發見せんとすることが、日本精神の根本であると思ふ。その宇宙一切の調和といふ根本要求よりすれば、小さい個人の要求のごときは、取るに足らない一小事として棄却せられる。これ日本人が、家族のため、國家のため、全社會のために、喜んでその一身を犧牲にする所以である。この調和愛を我々は、日常生活・思想・文學・美術・政治・經濟の一切に發見する。この事は、我々が米國などを旅行する時殊に痛切に感ずる。また支那人と比較しても痛切に感ずる。

かかる調和癖が強烈であるから、我々は日本の文化にも思想にも、常に一つの調和を發見しようと努力する。それ故に佛教が日本に流入すると、佛を最上位に置く思想が、天皇を第一位に置く日本思想と合致しないから、行基が出て本地垂迹說を立てて神道と佛教とを調和させてしまつた。また儒教が孝といふ觀念を日本に輸入すると、日本從來の忠といふ觀念と調和しないから、菅原道眞が顯れて忠孝一本といふ新說を作つて、儒教と日本思想とを調和させてしまつた。その後また、宋儒の新說が日本に入つてくると、林羅山は神儒一致論を唱へ、老子の教が盛行すると雨森芳洲は三聖一致說を出して、老子と孔子と釋迦とはその說一致すと教へ、陽明學が日本に入ると、大鹽平八郎のごときは神道と王學とを一致せしめて日本化した。

この日本人の調和愛好は、歐米人の差別好みと較べて、甚だしい特色をなしてゐると思ふ。ここに日本人の思想的根本がある。

雨森芳洲　江戸時代の學者。名は俊良、京都の人、寶曆五年歿。年八十八。

第五は樂天性である。日本民族を東洋人なるが故に、東洋人通有の宿命論に囚へらるゝ悲觀國民となすのは、私の贊同し難きところである。日本人はその風土・食物・生活から言つても、その外國人に征服されなかつた歷史から言つても、本來は樂天的である。佛教といふ、あの莊嚴にして悲哀空寂的な教理も、日本人の性格を甚だしく悲觀的にすることは出來なかつた。應仁の亂以後の悲慘な國民生活も、遂に日本人を全然厭世的に變化せしめることが出來なかつた。

古事記時代や、萬葉時代の、あの朗かな心持は、七百年の專制封建政治の下においても、全然窒息しきらなかつたのである。近代の代表的思想家貝原益軒は次の樣に言つてゐる。

「樂しみは是人心の天機、常人と雖も亦皆これを有す。豈ただ人心この樂しみあるのみならんや。草木の發生、禽獸の和鳴の如き、亦これ天機の發動、以てその樂しみを爲すべし。」（愼思錄）

彼は、陰鬱なる德川の警察政治時代に於てすら、天と地との萬象に人生の悅樂を看取し、一切の社會現象に感謝と天惠とを味讀したのである。それは、日本民族の本性が、天と地と人の世とを喜び歌ふ樂天の氣に富んでゐるからである。德川の專制時代に於てすら樂天的であり得た日本人が、明治大正より昭和の新しい時代に入り、天空海濶の性情を發露し來つて、樂天歡地の風を社會に瀰漫せしむるは理の當然である。二月梅の花開き、十月菊の花薫る日本に於て、我々は半歲雪に閉さるゝ露西亞人のやうに、病的な陰慘な社會觀を抱き得ないのは、あまりに明白な事理である。（中道を歩む心）

一三　鉢木

ワキ　行くへ定めぬ道なれば、來し方も何處ならまし。

是は一所不住の沙門にて候。我、此の程は信濃の國に候ひしが、餘りに雪深くなり候程に、まづ此の度は鎌倉に上り、春になり、修行に出でばやと思ひ候。

信濃なる淺間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井山、捨つる身になき友の里、今ぞ憂き世を離坂、墨の衣のうすひ川、下す筏の板鼻や、佐野のわたりに着きにけり。

ワキ　急ぎ候程に、上野の國佐野のわたりに着きて候。あら笑止や、又雪の降來りて候。此の處に宿を借らばやと思ひ候。いかに此の家の內へ案內申し候。

ツレ　誰にて渡り候ぞ。

ワキ　是は修行者にて候。一夜の宿を御貸し候へ。

ツレ　易き御事に候へども、主の御留守にて候程に、御宿は叶ひ候まじ。

ワキ　さらば、御歸りまでこれに待ち申さうずるにて候。

ツレ　それはともかくもにて候。わらはは外面へ出でむかひ、此の由を申さばやと思ひ候。

シテ　あ、降つたる雪かな。いかに世にある人のおもしろう候らん。それ「雪は鵝毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氅を被て立つて徘徊す」といへり。されば、今降る雪ももと見し雪にかはらねども、我は鶴氅を被て立つて徘徊すべき袂も朽ちて、袖せばき細布衣、陸奥のけふの寒さをいかにせん。あら、面白からずの雪の日やな。

あら、思ひよらずや。此の大雪に何とて是に佇みて御入り候

ぞ。

ツレ　さん候。修行者の御入り候が、一夜の御宿と仰せ候程に、御留守の由申し候へば、御歸りまで御待ちあらうずる由仰せ候程に、これまで參り候。

シテ　さて其の修行者はいづくに渡り候ぞ。

ツレ　あれに御入り候。

ワキ　我等が事にて候。まだ日は高く候へども、あまりの大雪に前後を忘じて候程に、一夜の宿を御貸し候へ。

シテ　とめたくは候へども、我等夫婦さへ住みかねたる體にて候ほどに、なか〳〵御宿は思ひもよらぬ事にて候。これより十八町あなたに山本の里とてよきとまりの候。日の暮れぬ先に、一足も早く御出で候へ。

ワキ　さては、しかと御貸あるまじいにて候か。

シテ　御痛はしくは存じ候へども、御宿はまゐらせがたう候。

ワキ　あら、曲もなや。よしなき人を待申して候ものかな。

ツレ　あさましや。我等斯様に衰ふるも前世の戒行拙き故なり。せめては斯様の人に値遇申してこそ後の便りともなるべけれ。然るべくば御宿を參らせたまひ候へ。

シテ　さやうに思召さば、何とて以前には承り候はぬぞ。いや、此の大雪に遠くは御出で候まじ。某追付き止め申し候べし。「のう〳〵、旅人、御宿參らせうのう」。餘りの大雪に、申す事も聞えぬげに候。痛はしの御有様やな。もと降る雪に道を忘れ、今降る雪に行方を失ひ、一つ處に佇みて袖なる雪を打拂ひ打拂ひし給ふけしき、古歌の心に似たるぞや。「駒とめて袖打拂ふかげもなし、佐野のわたりの雪の夕暮」。斯様に詠みしは大和路や三輪が崎なる佐野のわたり。是は東路の佐野のわたりの雪の暮に迷ひ勞れ給はんより、見苦しく候へど、一夜は泊り給へや。

駒とめて
新古今集の歌、
藤原定家の詠。

（川端玉章筆）

鉢木

げに是も旅の宿。假初ながら値遇の緣。一樹の蔭の宿りも此の世ならぬ契なり。それは雨の樹蔭、これは雪の軒ふりてうきねながらの草枕、夢より霜や結ぶらん。

シテ　いかに申し候。お宿は申して候へども、何にても候へ、參らせうずるものもなく候はいかに。

ツレ　折節これに粟の飯の候ほどに、苦しからずば參らせられ候へ。

シテ　さらば其の由申し候べし。

いかに申し候。御宿をば參らせて候へども、何にてもまゐらせうずる物もなく候。折節これに粟の飯のある由申し候、苦しからずば聞召され候へ。

ワキ　それこそ日本一の事にて候。たまはり候へ。

シテ　のう、聞召されうずると仰せ候。急いで參らせられ候へ。

ツレ　心得申し候。

シテ　總じて此の粟と申すものは、いにしへ世にありし時は、歌に詠み詩に作りたるをこそ承りて候に、今は此の粟を以て身命をつぎ候。げにや盧生が見し榮華の夢は五十年。其の邯鄲の假枕、一睡の夢の覺めしも粟飯炊ぐ程ぞかし。あはれや、

一睡の夢　邯鄲の夢とも黄粱の夢ともいふ。盧生が道士呂翁の枕を借りて、假寢した間に、富貴榮華の夢を見たといふ故事。人生のはかないたとへ。

げに我もうちも寐て、夢にも昔を見るならば慰むこともあるべきに、のう御覽ぜよ、かほどまで住みうかれたる故郷の松風寒き夜もすがら寐られねば、夢も見ず。なに思出のあるべき。

シテ　夜の更くるについて次第に寒くなり候。何をがな火に焚いてあてまゐらせ候べき。思ひ出したることの候。鉢の木を持ちて候。これを切り、火に焚いてあて申し候べし。

ワキ　げに〳〵鉢の木の候よ。

シテ　さん候。某世にありし時は、鉢の木に好き、數多木を集め持ちて候ひしを、斯樣の體に罷りなり、いや〳〵木好きも無用と存じ、皆人に參らせて候。さりながら、今も梅・櫻・松を持ちて候。あの雪持つたる木にて候。某が祕藏にて候へども、今夜の御もてなしにこれを火に焚き、あて申さうずるにて候。

ワキ　いや〳〵是は思ひもよらぬ事にて候。御志はありがた

う候へども、自然又おこと世に出でたまはん時の御慰にて候間、なか〳〵思ひもよらず候。

シテ　いや、とても此の身は埋木の花さく世に逢はんこと、今此の身にて逢ひがたし。

ツレ　たゞいたづらなる鉢の木を御身のために焚くならば、

シテ　是ぞまことに難行の法の薪とおぼしめせ。

ツレ　しかも此の程雪降りて、

シテ　仙人につかへし雪山の薪、

ツレ　かくこそあらめ。

シテ　我も身を捨て人のための鉢の木切るとても、よしや惜しからじ。

と雪打拂ひて見れば、おもしろや、いかにせん。まづ冬木より咲きそむる窓の梅の北面は雪封じて寒きにもこと木よりまづ

窓の梅　池凍東頭風度解、窓梅北面雪封寒。（和漢朗詠集　菅原淳茂）

見じといふ人　山里の折りかけ垣の梅の花いかなる人の見じといふらん（菅家後集）

みかきもり　御垣守衛士のたく火の夜はもえて晝は消えつゝ物をこそ思へ（詞花集、大中臣能宣）

先だてば、梅を切りやそむべき。見じといふ人こそうけれ、山里の折りかけ垣の梅をだに情なしと惜しみしに、今更薪になすべしとかねて思ひきや。櫻を見れば春ごとに花すこし遲ければ、此の木やわぶると心を盡くしそだてしに、今はわれのみわびて住む家櫻切りくべて、ひざくらになすぞ悲しき。

シテ　さて松はしも、げに枝を矯め、葉をすかして、かゝりあれと植ゑおきし其のかひ今はあらし吹く松はもとより煙にて薪となるもことわりや。よく切りくべて今ぞみかきもり衛士の焚く火は御爲なり。

ワキ　近頃よき火にあたり、寒さを忘れて候。

シテ　御出により我等も火にあたりて候。

ワキ　いかに申し候。主の御名字をば何と申し候ぞ。承りた

シテ　いや、某は名字もなきものにて候。

ワキ　何とおほせ候とも、唯人とは見えたまはず候。自然のときのためにて候。何の苦しう候べき。御名字を承り候べし。

シテ　此の上は何をか包み候べき。是こそ佐野源左衛門尉常世がなれる果にて候。

ワキ　それは、何とてかやうの散々の體にはなりたまひて候ぞ。

シテ　其の事にて候。一族どもに押領せられて、かやうの身となりて候。

ワキ　のう、それは、何とて鎌倉へ御のぼり候うて御沙汰は候はぬぞ。

シテ　運の盡くるところは、最明寺殿さへ修行に御出の上は候。かやうに落ちぶれては候へども、御覽候へ、これに武具一領、長刀一枝、又あれに馬を一匹つないで持ちて候。　これは、只今にてもあれ、鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりともこの具足とつて投げかけ、錆びたりとも長刀を持ち、痩せたりともあの馬に乘り、一番に馳參じ、着到につき、さて合戰はじまらば、敵大勢あり

たゞ頼め
たゞ頼めしめじが原のさしも草
われ世の中にあらんかぎりは
（新古今集）

北條時頼

りとても一番にわつて入り、思ふ敵と寄合ひ打合ひて死なんこの身の、このまゝならば、いたづらに飢につかれて死なん命。なんぼう無念の事候ぞ。

ワキ　よしや、身のかくては果てじ。たゞ頼め、われ世の中にあらんほど、またこそまゐり候はめ、暇申して出づるなり。

シテ　名殘をしの御事や。

ツレ　初は包むわが宿のさも見苦しく候

ヘど、しばしはとまりたまへや。

ワキ　とまる名殘のまゝならば、さて幾度かゆきの日の

シテ　空さへ寒き此の暮に、

ツレ　いづこに宿をかりごろも、

ワキ　けふばかりとまりたまへや。

シテ　名殘は宿にとまれども、暇申して

ツレ　御出か。

ワキ　さらばよ、常世。

シテ　また御入り。

ツレ　自然鎌倉に御上りあらば御尋あれ。けうがる法師なり。

ワキ　かひ〳〵しくはなけれども、公方の緣になり申さん。御沙汰捨てさせたまふな。

といひすてて、出船のともに名殘や惜しむらん。

中入

後ジテ　いかに、あれなる旅人、鎌倉へ勢ののぼるといふはまことか。なに、おびただしうのぼる。さぞあるらん。東八箇國の大名、小名思ひ〳〵の鎌倉入り、さぞ見事にて候らん。白金物うつたる絲毛の具足に金銀を延べたる太刀、刀、飼ひに飼うたる馬に乘り、乘替、中間きらびやかに打連れ〳〵のぼるなかに、常世が常にかはりたる馬、物具や打物の、ものそのものにあらざる氣色、さぞ笑ふらん。さりながら所存は誰にも劣るまじ。

と心ばかりは勇めども、勇みかねたる痩馬の、あら道おそや。急げども急げども、弱きは弱き柳の絲のよれによれたる痩馬なれば、打てどもあふれども先へは進まぬ足弱車の乘り力なければ、追つかけたり。

ワキ　いかに、誰かある。
ツレ　御前に候。
ワキ　國々の軍勢どもは皆々來りてあるか。
ツレ　さん候。悉く參りて候。
ワキ　その諸軍勢の中に、いかにもちぎれたる具足を着、錆びたる長刀を持ち、痩せたる馬を自身控へたる武者一騎あるべし。急いで此方に來れと申し候へ。
ツレ　畏まつて候。
　いかに誰かある。
狂言　御前に候。
ツレ　君よりの御諚には、諸軍勢の中にちぎれたる具足を着、錆びたる長刀を持ち、痩せたる馬を自身控へたる武者あるべし。急いで尋ねて御前へまゐれ」との御事にて候。

狂言　畏まつて候。
　いかに申し候。
シテ　何事にて候ぞ。
狂言　急いで御前へ御參り候へ。
シテ　何と、某に御前へ參れと候や。
狂言　なかなかのこと。
シテ　あら、思ひもよらずや、定めて人たがへにて候べし。
狂言　いや〳〵其方の事にて候。その仔細は「諸軍勢の中にて
　いかにも見苦しき武者を連れてまゐれ」との御事にて候が、見
　申せばそなたほど見苦しき武士も候はぬほどに、さて申し候。
　急いで御參り候へ。
シテ　何と、たとへば、諸軍勢の中にいかにも見苦しき武者にま
　ゐれ」と候や。

狂言　なか〳〵のこと。

シテ　さては某が事にて候べし。「畏まつたる。」と御申し候へ。

狂言　心得申し候。

シテ　げに〳〵これも心得たり。某が敵人、謀叛人と申しあげ、御前に召出され、頭を刎ねられんためな。よし〳〵、それも力なし。いで〳〵、御前に參らん。

と大床さして見渡せば、今度の早打に上り集る兵、きら星の如く並み居たり。さて、御前には諸侍その外數人並み居つゝ、目を引き、指をさし、笑ひあへる其の中に、横縫のちぎれたる古腹卷に錆長刀やう〳〵に横たへ、わるびれたる氣色もなく、參りて御前にかしこまる。

ワキ　やあ、いかに、あれなるは、佐野源左衞門尉常世か。これこそいつぞやの大雪に宿借りし修行者よ。見忘れてあるか。

いで汝、佐野にて申しゝよな、今にてもあれ鎌倉に御大事あるならば、ちぎれたりとも其の具足取つて投げかけ、錆びたりとも其の長刀を持ち、痩せたりともあの馬に乘り、一番に馳參ずべきよし申しつる言葉のするをたがへずして參りたるこそ神妙なれ。まづ〳〵今度の勢づかひ、全く餘の儀にあらず、常世が言葉の末、眞か僞か知らんためなり。また當參の人々も訴訟あらば申すべし。理非によつて其の沙汰致すべき所なり。まづ〳〵沙汰のはじめには、常世が本領佐野の莊三十餘鄕返し與ふる所なり。又何よりも切なりしは、大雪降つて寒かりしに、祕藏せし鉢の木を伐り、火に焚きあてし志をば、いつの世にか忘るべき。いで其の時の鉢の木は梅・櫻・松にてありしよな。

その返報に、加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松井田、合せて三箇

の莊、子々孫々に至るまで相違あらざる自筆の狀、安堵に取添へたびければ、常世はこれを賜はりて三たび頂戴つかまつり、シテ　これ見たまへや人々よ、はじめ笑ひし輩も、これ程の御氣色さぞ羨ましかるらん。

さて國々の諸軍勢、皆御暇賜はり、故郷へとてぞ歸りける。その中に、常世は喜の眉を開きつゝ、今こそ勇め此の馬に打乘りて、上野や佐野の船橋とりはなれし本領に安堵して歸るぞ嬉しかりける。（觀世流謠曲）

一四　建國の精神

永田秀次郎

我が建國の精神は實に高明なる精神である。是を現代に適用して少しも差支の無い精神である。是を世界に推し弘めて少しも不都合の無い精神である。

永田秀次郎
淡路の人、明治九年生、東京市長、貴族院議員。

我々の國民性は、君國の爲には水火を辭しない、燃ゆるが如き愛國の熱情を持つて居る。併しながら、其の本體は先天的平和を好み、天然を愛し、階級的の觀念極めて薄く、衆と共に樂しむ事を好む所に在る。

此の國民性は神代の昔の神話にも既に表はれて居る。天祖天照大御神は言ふ迄もなく女神である。光明を垂れ、平和を愛し給ふ女神である。素盞嗚尊が亂暴をなされた時も、天岩戸に隱れて爭をお避けになつた程に平和を好み給ふ女神である。而も八百萬の神は其の御德を慕つて、何の疑もなく歸依渴仰されたのである。是は我々の祖先が平和を好み、勇武よりは明德を尙んだことを示すものである。又天孫降臨に先だつて、出雲の大國主神が歸順して何の戰爭も無かつたのも、大義名分の前には、何人も之に反抗しないと云ふ理想を示すものであり、平和

を愛する國民性の表現であると思ふ。我が國民性は第一に平和を愛し、大義名分を重んずるものであると思ふ。而して是が則ち高明なる我が建國の精神を語るものであると言はねばならぬ。

永田秀次郎

第二に、三種の神器に關して、我が國民性を考へて見たい。北畠親房は神皇正統記に於て、「鏡は一物をたくはへず、私の心なくして萬象を照らすに、是非善惡の姿現ばれずと云ふ事なし。其の姿に隨ひて感應するを德とす。是正直の本源なり。玉は柔和善順を德とす、慈悲の本源なり。劍は剛利決斷を德とす、智慧の本源なり。此の三德を合せ受けずしては天下の治まらむこと洵に難かるべし。」と

解說して居る。則ち鏡は正直を意味し、玉は慈悲を意味し、劍は決斷を意味すと云ふのである。殊に鏡を以て第一位に置かれた事は、我が國民道德の高明なる理想を語るものと言はねばならぬ。若し單に尙武を以て立國の要義とするならば、劍を第一位に置くべき筈である。此の點から考へても、我が國民性は正義を愛し、平和を好むものであつて、我が國民は決して好戰國民にあらざる事を知るに足ると思ふ。

次に我が神話には、萬機公論に決すべしと云ふ理想が明瞭に表はれて居る。則ち大事件のある度毎に、八百萬の神々が天の安の河原に神集ひに集ひ、神謀りに謀り給ひ、衆議に依つて事を決せられた。例へば天照大御神が天岩戸に入らせられた時に八百萬の神が天の安の河原に集まつて評議をして、思兼神の智謀によつて舞樂を奏したのである。聖德太子の憲法にも、更に

又明治維新の五箇條の御誓文中にも、凡て皆神代の理想が表れてゐる。此の如く萬衆皆相融和して何の私心なく專横なく、全く文字通りに萬機公論に決すると言ふ公明なる心事は、卽ち我が國民の萬年に亙つて規範とすべき教訓である。所謂君民同治の意義が此の間に明かにされて居るのである。

尙神話に見える重大なる理想は、君幹臣枝の理想である。我が祖先は第一に此の地球を生まれたのである。そして我々は天祖の直系を本家とし君とし、天祖の傍系を分家とし臣として繁榮したのである。故に我々君臣の關係は征服されたのでは無い、繁榮して來たのである。切つても切れぬ血族の關係である。故に大義名分が餘りに明かに定まつて居て、直系が皇位に卽かれると云ふ事は、太陽が東から出ると云ふが如くに自然であつて、疑問を超越して居るのである。茲に我々君臣間の親愛

新渡戸稻造
岩手縣の人、文久三年生、農學博士、法學博士、前國際聯盟事務次長、貴族院議員。

がある。茲に我々臣民の自尊心がある。天皇の尊嚴は我々自身の尊嚴である。故に我々臣民は皇室の外は凡て平等である。我々の社會的地位には貴賤貧富の差別があると云つても、均しく是高皇產靈神の子孫である、下等動物でもなければ上等動物でも無い、凡て平等である。

之を約言すれば、我が建國の精神は、第一に平和を好愛する高明なる心事を理想とし、第二に萬機公論に決するの理想、第三に君民同治、四民平等を理想としてゐる。凡そ是等の理想は所謂之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らざるものであつて、我々は此の精神を時代に適應して運用して行かなければならぬのである。

（建國の精神に還れ）

一五　國際聯盟

新渡戸稻造

先頃ある友人が我が輩に問うて、現在の國際聯盟は何時まで續くか」といつた。我が輩は彼の意のある所を十分に理解しなかつた爲に、その說明を求めた所が、彼が言ふには、「今日まで世界の歷史を見れば、國際聯盟に髣髴たるものが幾度となく、構成されたけれども、何れも消滅した實例を見れば、かくの如き計畫は決して長く續くとは思はれない。國家は長命であるが、國際的組織の短命なことは歷史的法則とでも稱してよからう。」と。我が輩は彼に答へて「さすがに君は歷史家である。君の歷史の知識は我が輩も尊敬するが、併し人間としては未だしだね。」と揶揄した。

一體歷史家といふものは眼を後ろに持つて、唯過去のみに着眼してゐる爲に、周圍の見えないものが多い。いはば一種の不具者が多い。我が輩も歷史を愛讀するが、かかる不具者にはなりたくない。故きを溫ねることは愉快で有益であるが、併し進んで新しいものを知る所まで行かねばつまらない。何故なれば、人間の眼は前部についてゐる。希望・信仰、或は創造力を藉りて、將來を見るにあらざれば、人間たる重い使命を完うすることが出來ない。國際聯盟に就いて見ても、過去に於ては悉く失敗したが、この事實のみを以て、現在のものの失敗を推斷するのは、現代人の希望と信仰と創造力を無視するものである。

國際聯盟が今後長く續くことを希望し、且信ぜられるのは、昔のそれに比して異なる二點があるからである。その一は古の戰爭は國家を擧げてしたとは云ひながら、之に關與したものはただ或階級の少數者であつた。國民皆兵と云はるゝ時代になつてさへも、戰爭は戰鬪員のみの與ることであつて、一般國民は無關係であつた。然るに先般の世界戰爭に見ると、國の封鎖が

行はれて、敵も味方も國民全體が食糧の供給に苦しんだ。その上に又毒瓦斯の使用の爲に、戰線に立たない老弱婦女子までも、戰線にあるものと同じ取扱を受けることになつた。國民皆兵は文字通りの意味を持つことになつた。是に於て戰爭防止の聲は男女の區別なく、如何なる階級にも聞かれるに至つた。我々日本人は聯盟軍に參加したとは云へ、實際戰爭の苦を體驗しなかつたから別であるが、英・佛・白耳義等では敵飛

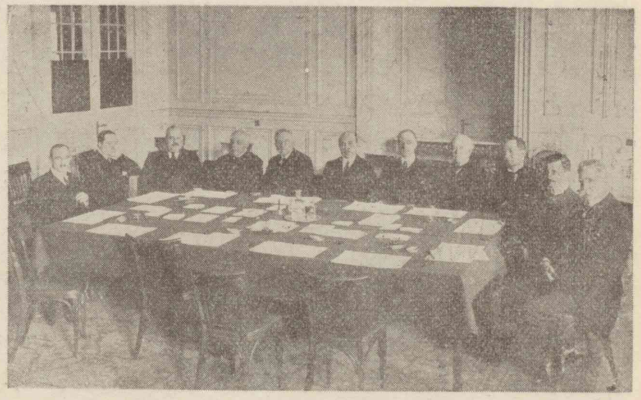
世界大戰（その一）

行機の不時の襲來を顧慮して、四年間婦女子も寢衣（ねまき）に着替へることを躊躇した。のみならず、國內勞働力の不足の爲、有らゆる階級の婦人達は軍需品等の製造に從事した。勞働の苦痛も、敵來襲の恐怖も辨じ得ざる小兒さへ、食糧缺乏は體驗させられたから、戰爭の忌まはしさは彼等の骨に沁みて覺えた所である。

第二の點は次の事である。從來の聯盟は一時の約束に過ぎなかつた。これを實行しようがしまいが、それを責める機關はなかつた。所が現在のはさうでない。繼續的の機關が幾つも備つて居る。約束したことは履行しなければならぬやうな仕組になつて居る。現今の國際聯盟は少くとも右の二點に於て昔のと違ふから、永續するものと信ぜられる。

現行の國際聯盟には、契約の實行を促す恒久的機關が、三重に設けられてゐる。卽ち其の一は總會である。これは一年に一

回開かれ、前年に約束したことを實行しない政府に對し、其の責を問ふことになつて居る。其の二は理事會で、一年に四回會合して各國の約束實行について討議する。第三は繼續的な事務局で、世界の官衙とも稱すべき組織であり、常に何國が何の約束を守るか、又は守らぬか、その守らぬ理由は何であるかを審査してゐる。

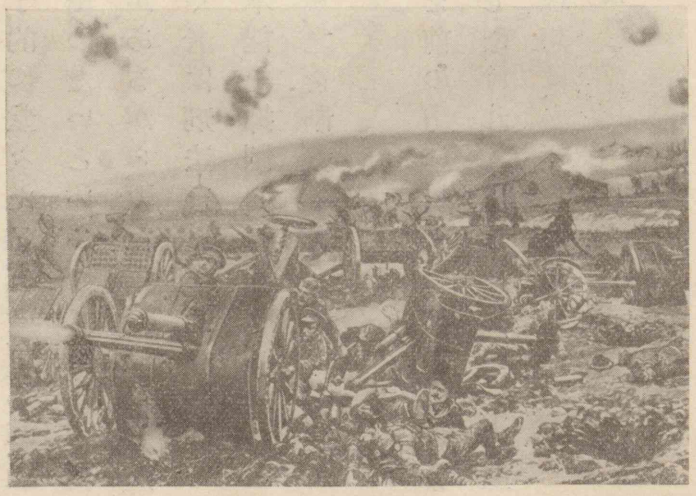


國際聯盟理事會

＊　＊　＊

然らば國際聯盟は果して戰爭を防止し得るか。一體戰爭と云ふものは人間の天性に備つて居るものである。心理學者に言はせ

ると、爭鬪性は男子ばかりでなく、女子にもあるといふ。戰を營む天性が人間にある以上、戰爭は止まぬと論ずる人がある。是は頗る簡單な議論であるが、隨分廣く世に行はれて、而もこれを以て國際聯盟に反對する者がある。我が輩が二三年前亞米利加の某將軍に會つて、亞米利加は何故に國際聯盟に入らぬかと言つたら、この議論を持ち出した。國際聯盟論者も人間に爭鬪性のあることは十分認めるから、この本能を制裁す



世界大戰（その二）

る道を講ずるので、本能そのものを止めよと云ふのではない。畢竟喧嘩も宜いが、其の爭や君子的に堂々たるものであれ、願はくは武力に訴へずして正邪を極めたいといふのである。例へば人間には物を取りたい本能があるから、取得は法律上財産の制度を以て之を規定し、之に背く者は刑法を以て罰することになつてをり、又道德を以てこの本能を抑制して居る。これと同じく爭鬪性の本能を認めるから、之を制裁しようと云ふのが卽ち戰爭防止の意味である。

繰返していふ、我々人類は眼を前の方に持つて居る以上、希望・信仰・創造力を以て將來を洞見しなければ滿足しない。古聖人の「和を以て貴とす。」といはれた理想は、必ずその努力に由つて實現さるゝであらう。（東西相觸れて）

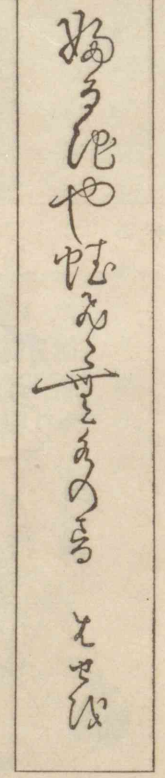
和を以て貴とす　聖德太子の憲法十七條の第一に「以レ和爲レ貴」とある。

筆蹟　ふる池や蛙飛こむ水の音　はせを

蕪村　谷口蕪村とも云ふ。畫家。俳人。天明三年歿。

一六　初時雨

旅人と我が名呼ばれん初時雨。　松尾芭蕉



松尾芭蕉筆蹟

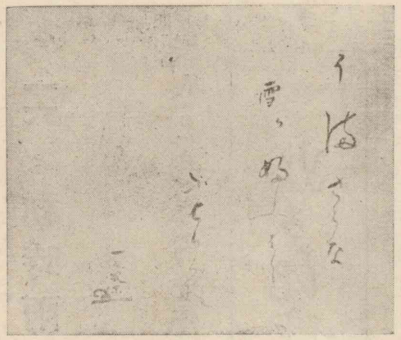
初しぐれ猿も小蓑をほしげなり。
箱根こす人もあるらし今朝の雪。
いざゆかん雪見にころぶところまで。
埋火や壁には客の影法師。
初しぐれ眉に烏帽子の雫哉。　與謝蕪村

楠の根を靜かにぬらす時雨かな。
雪白し加茂の氏人馬でうて。
風呂入に谷へ下る
や雪の笠。
埋火や我がかくれ
家も雪の中。

筆蹟
夜半亭燕村寫
鶯の身を逆に初音かな　其角

筆蹟
うまさうな雪か
ふふはりふはり
かな　一茶

一茶
文化文政の俳人、本名は小林彌太郎、信濃柏原に生れ、文化十年歿。年六十五。



小林一茶筆蹟

やあしばらく蟀だまれ初時雨。
初時雨夕飯買ひに出たりけり。
是がまあつひの栖か雪五尺。

小林一茶

與謝燕村筆蹟

うまさうな雪がふうはりふはり哉。
埋火のかき搜しても一つ哉。

塞翁が馬
故事。淮南子人間訓に見える。

一七　芳流閣上の血戰

古の人謂はずや、禍福は糾へる繩の如し　人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る所、はた禍の伏する所、彼にあれば此にありとは思へども、豫てより誰かよくその極みを知らん。憐むべし犬塚信乃は、親の遺言、記念の名刀、心に占めつ、身につけつ、艱苦のうちに年を經て、得難き時を得てしかば、遙遙滸我へもたらして、名を揚げ家を興すべかりし、その福は禍とふりかはりたる村雨の、又は故の物ならで、我が身を劈く讐とぞなりし、憾をここに釋く由もなく、事急にして意外にあり、僅かに當座の辱を避けばやと思ふばかりに、夥多の圍を切開きて、芳流

閣の屋の上に攀登れどもとにかくに、脱れ去るべき道のなければ、そこに必死を極めたる、心の中はいかなりけん、思ひ遣るだにいと痛まし。

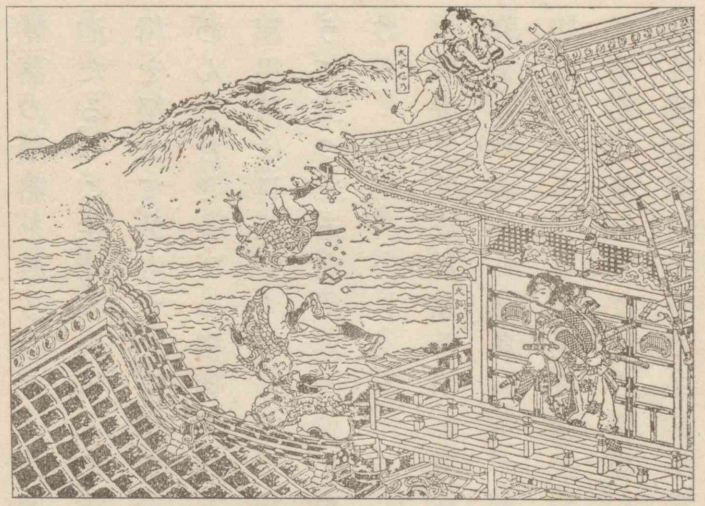
さればまた犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舍に繫がれし、禍は今恩赦の福。我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役儀。「犬塚信乃を搦めよ。」とて、なまじひに擇み出されつ。他の憂を身の面目に、今更用ひられんこと、願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く、彌高き、かの樓閣は三層なり。その二層なる檐の上まで、身を霞ませて登りて見れば、足下遠く、雲近く、照る日烈しく堪へ難き、頃は六月二十一日、昨日も今日も

瀧澤馬琴

乾蒸の燄熱を渡る敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て、下には大河滔滔たる、ここ生死の海に入る、流は名に負ふ坂東太郎、水際の小舟楫を絶えて、進退すでに谷まりし敵にしあれば、いかで我繫ぎ留めんと、むさゝびの樹傳ふ如くさら〳〵と登りはてたる三層の屋根には、目柴翳す由もなく、かたみに透をねらひつゝ、睨まへあうて立つたる有樣、浮圖の上なる鶴の巢を、巨蛇の狙ふに似たりけり。

廣庭には成氏朝臣・横堀史在村等の老黨・若黨、圍繞せし床几に腰をうち掛けて、勝負いかにと見上げたり。また閣の東西には、腹卷したる許多の士卒、槍・長刀を煌かし、或は箭を負ひ、弓杖突立て、組んで落ちなば擊ち留めんとて、項を反してこれを觀る。加之外面は、連綿として杳かなる、河水遶りて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け、膂力衰へず、よく見八に捷ちたりとも、墨氏が飛鳶を

借らざれば、虚空を翔けるべくもあらず。魯般が雲の梯なければ、地上に下るべくもあらず。渠鳥ならずして羅に入りぬ。獸ならずして狩場に在り。三寸息絶ゆれば、ことみな休まん。脱れはてじと見えたりけり。



芳流閣上の血戰（南總里見八犬傳挿繪）

その時信乃思ふやう、初層、二層の屋の上まで、追登らんとせし兵等を、斬落しつるその後は、絶えて近づくものなきに、今ただ獨り登り來ぬるは、世に覺ある力士ならん。きやつはこれ膳臣巴提使が、虎を手擊ちにせ

る勇あるか、また富田の三郎が、鹿の角を裂ける力あるか。遮莫一人の敵なり。引組んで刺違へ、死するに難きことやはある。よき敵にこそ。ござんなれ目に物見せんと血刀を袴の稜もて推拭ひ、高瀬の如き方桿に、立つたるまゝに寄するを待てば、見八もまた思ふやう、「かの犬塚が武藝勇悍、素より萬夫不當の敵なり。さりとても搦めかねて、他の援を借ることあらば、獄舍の中よりこの役儀に、擇み出されしかひもなし。搦め捕るとも擊たるゝとも、勝負を一時に決せんものをと思ひにければ、ちつとも擬議せず、「御諚ざふ」と呼掛けて、持つたる十手を閃かし、飛ぶが如くに方桿の左の方より進み登りて、組まんとすれども寄せつけず。「心得たり」と鋭き太刀風に擊つをはつしと受留めて、拂へば透かさず斬りこむ刀尖を、支へて流す一上一下、すべる甍を踏止めて、頻りに進む捕手の祕術。彼方も劣らぬ手練の働、嵩より落す太

刀筋をあちこち外す虚々實々、未だ勝負をわかざれば、廣庭なる主從士卒は、手に汗握らざるもなく、瞬きもせず氣を籠めて、見る目もいとど遙なり。

さるほどに犬塚信乃は、侮り難き見八が武藝に、敵を得たりけりと思へば、勇氣彌增して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音・掛聲。　兩虎深山に挑む時、錚然として風發り、二龍青潭に鬪ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき。　春ならば峰の霞か、夏ならば夕べの虹かと見るばかりなる、いと高き閣の棟にして、死を爭ひしていたらく、世に未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鎖、肱當のはづれを、裏かくまでに切りさかれしかど、太刀を拔かず。　信乃は刀の双も續かで、初に淺痍を負ひしより、次第に疼みを覺ゆれども、足場をはかりて撓まず去らず、疊みかけて擊つ太刀を、見八右手に受流して、返す拳に付入りつゝ、やつと掛けた

南總里見八犬傳
瀧澤馬琴の作、馬琴は江戸時代の小說家で、嘉永元年歿、年八十二。

る聲とともに、眉間を望みてはたと打つ十手をちやうと受留むる信乃が双は鍔際より折れて遙に飛び失せつ。　見八得たりとむづと組むを、そがまゝ左手に引着けて、迭に利腕しかと取り、捩倒さんと曳聲合せて、揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊しく踏みすべらして、河邊の方へころ〳〵と、身をまろばせし覆車の俵、坂より落すに異ならず。　勾配險しき棧づくりに、削り成したる甍の勢、留まるべくもあらざめれど、迭にとつたる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙なる河水の底には入らでほどもよし、水際に繫げる小舟の中へ、うち累りつゝ撞と落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音する水煙、纜ちやうと張り切つて、射る矢の如き早河の、眞中へ吐出されつ。　しかも追風と引く潮に、誘ふ水なる下り舟、行方も知らずなりにけり。（南總里見八犬傳）

一八　梅花の清香

上田萬年

上田萬年
學者。慶應二年、名古屋に生る。東京帝國大學名譽教授。文學博士。

寒風凛冽の苦冬を經、夜霜曉雪の操節を持して、百花凋落の後、ひとり、馥郁の香を放つは梅花なり。昔は、菅丞相道眞此の花を愛して、其の士節を全うせり。

菅原道眞

新井白石、夙く落魄苦學の頃一株の梅を愛し、既にして甲府侯に仕ふるに及んで、特に湯島天神祠の香月庵下に移居して、園庭に梅を植ゑ、居成りて天爵堂と名づけたり。蓋し私かに菅公に淑するなり。

嗚呼、菅公は一儒門より出でて、聖帝の信任に遇ひ、閥族權柄の代に、異數の拔擢を蒙りて、遂に執政の位に登れり。白石また一書生より身を起して、一人の知己と相識り、封建專制の世に破格の寵遇を得て、遂に經國の功を樹てたり。而して、菅公は藤氏の怒に觸れて、敗殘の晩年を筑紫の配所に在りて詩賦に送り、白石は、林家の爲に忌まれて、失意の半生を千駄ケ谷の閑居に隱れて著作に耽りたり。昨是今非の夢の跡、何ぞ相似たることの酷しき。

新井白石

曩に、菅公の德望高うして、藤氏の妬娼漸く深き時、學友三善清行は、孔子浙を接けて齊を去るの機を說いて、解官退身の安穩なるを勸めたり。然れども、菅公は敢然として其の志を行はんとして、遂に彼の禍に逢へり。白石已に林家の疾惡急にして、災の身邊に迫るや、窓友室鳩巢は覆車の遺轍を說いて、高踏勇退の恙無きを告げたり。

然も、白石は毅然として、其の志を抂げずして、遂に四面楚歌の慘に遭へり。

然れども、道を秉つて國に殉ずるは士の大節なり。これ菅天神の千歳に廟食する處にして、白石の名譽、また梅花の清香に侔しかるべき所以なり。（新井白石）

一九　西風

長塚節

長塚節
小説家、茨城縣の人。大正四年歿。年三十七。

初冬の梢に慌ただしく渡つて、それから暫く騷いだ儘、其の後は磑（はた）と忘れて居て、稀に思ひ出したやうに、枯木の枝を泣かせた西風が、雜木林の梢に白く連なつて居る西の遠い山々の彼方に横臥して居たのが、俄に自分の威力を逞しうすべき冬の季節が、自分を棄てて去つたのに氣がついて、吹くだけ吹かねば止められない其の特性を發揮して、毎日其の特有な力が輕鬆な土を空に捲いた。

勘次は平生の如く娘のおつぎを連れて開墾地へ出た。おつぎは半纏を後へふはりと掛けた儘手も通さないで、肩へは襷を斜に掛けて萬能を擔いで居た。白い手拭とそれから手拭の外に少し覗いた後れ毛の歩く度にふら〳〵と動くのもしみじみと冷たさうであつた。

毎日吹き渡る西風は乾燥してゐる凡ての物を更に乾燥させねば止まない。

其の日も埃が天を焦して立つた。其の埃は黄褐色で、霧の如く地上の凡てを掩ひ、且包んだ。雜木林は一齊に斜に傾かうとして、梢は彎曲の線を描いた。併し勘次が目を放つて居るのは、足の爪先二三尺の、今唐鍬を以て伐り去つて、遙に後ろへ引いてそつと棄てた趾の一點である。おつぎは勘次が起した塊を一

つ一つ萬能の背で叩いて、さらりと解かして平にならして居る。おつぎは當面に埃を受けるのには遠く吹きつける土砂が頰を走つて不快であつた。それでも其の手もとは疎略ではなかつた。勘次は矢立の如き硬直な身體を伸長し屈曲させて、一歩一歩と運んだ。

その留守中のことである、養父の卯平と小學校から早歸りした忰の與吉は、家の竈の前で晝めしを食べてゐた。

たべ終つて、彼は冷えた身體に暖氣を欲して、茶釜を掛けた竈の前に懶い身體を蹲踞つた。卯平は更に熱い茶の一杯が飲みたかつたのである。彼は竈の底にしつとりと落ちついた灰に接近して手を翳して見た。まだ軟かに白い灰は微かに暖かつた。彼はそれから大籠の落葉を攫み出して茶釜の下に突込んだ。彼はすつと燐寸を擦つたが、其の火は手が落葉に達するまでには微かな煙を立てて消えた。燐寸はさうして五六本棄てられた。しかしやがて落葉には灰際から其の外側を傳つて火がべろ〳〵と渡つた。卯平は不自由な手の火箸で落葉を透した。

與吉は卯平の側から斜に手を出して居た。卯平は與吉の小さな足の甲へそつと手を觸れて見た。手も足もざら〳〵とこそばゆかつた。與吉は斜に身を置くのが少し窮屈であつたのと、叱言がなければ唯惡戯をして見たいのとで、側の竈の口へ別に自分で落葉に火を點けた。針金の樣な火をちらりと持つた落葉の一ひら一ひらが煙と共に輕くあがつた。落葉は直に白い灰になつて更に幾つかに分れて、與吉の頭髮から卯平の白髮に散つた。迅速で且壯快な變化を目前に見せる火が、彼等の惡

戯好きな心をどれ程誘つたか知れない。彼は落葉を掴んでは竈の口に投じて、ぼう〳〵と燃えあがる焔に手を翳した。茶釜がちうちうと少し響を立てて鳴り出した時、卯平は乾びたやうに感じて居た喉を濕さうとして、懶い臀を少し起して、膳の上の茶碗を取つて茶釜の湯を注いだ。柄杓の手を放して、再び茶釜の蓋をした時、にはかにぼうつと立つた焔の聲を聞いた。彼が思はず後を見た時與吉の驚愕から發せられた泣き聲が耳を打つた。熾な火の柱が近く目を掩うて立つて居た。彼は又直に激しい熱度を顔一杯に感じた。火はどうした機會にか、横に轉がしてあつた大籠の落葉に移つて居たのである。彼は突然與吉を傍に搔き退けた。彼はさうして無意識に火に成つた落葉を搔き出さうとしたが、自由を失うた手の鈍い運動は、其の火を消すに何の效果もなかつた。火は復怒つて彼の頰を舐め、彼の

手を燒いた。彼の目は昏んだ。卯平の視力が再び恢復した時には、火は既に天井の梁に積んだ藁束の亂れて覗いて居る穗先を傳つて昇つた。火は乾燥した藁束の周圍を舐めて、更に其の焔が薄闇い家の内から遁れようとして屋根裏を偃うた。それが迅速な火の力の瞬間の活動であつた。

火は瞬間に處々落窪んで窶れた屋根を全く包んでしまつた。卯平は數分時の前に豫期しなかつた此の變事を意識した時、殆ど喪心して庭に倒れた。與吉は火傷の疼痛を訴へて獨り悲しく泣いた。

疾風は其の威力を遮つて包んだ焔を搔退けようとして、其の餘力が屋根の葺草を吹き捲つた。火の粉は東鄰の主人の屋根の一角にどさりと留つた。近所の人々が驅けつけた時は、既に東鄰の主人の家を火がべろ〳〵と嘗めつゝあつたのである。

黄褐色の霧を以て四圍を塞がれつゝ、只管に其の唐鍬を打つて居た勘次は、此の兇事を知る理由がなかつた。開墾地に近い小徑を走つて行く人の慌ただしい樣子を見咎めて、彼は始めて其の火を知つた。

彼は殆ど其の脚力の及ぶ限り走つた。彼はおつぎが後に續かぬ事を顧慮する暇もなかつた。彼が自分の庭に立つた時は、古い煤だらけの粗末な建築は燒けてしまつて、主要の木材が僅かに焰を吐いて立つて居た。勘次は惘然として此の急激な變化を見た。彼は庭に立つて泣いて居る與吉を見た。與吉の横頰に印した火傷が彼の惑亂した心を騷がせた。勘次は又其の側に目を瞑つて後向になつて居る卯平を見た。卯平は何時の間に誰がさうしたのか筵の上に横たへられてゐた。彼は少い白髪を薙ぎ拂つて燒いた火傷のあたりを手で掩うて居た。

「わりやどうしたんだ。」勘次は忙しく聞いた。

「木の葉へ火くつついたんだ。」與吉は咽び入りながらいつた。

「汝でも惡戲したんぢやねえか。」勘次はもどかしげに烈しく追求した。

「おら爺と火あたつてたんだ、さうしたらくつつかつたんだ。」

さういつて與吉は俄に聲を放つて泣いた。勘次は其を聞いた瞬間、肩の唐鍬を轉がしてぶつりと土を打つた。唐鍬の刄先は卯平の頭に近く、筵の一端を掠めて深く土に立つた。それと共に彼は鄰の森の中の群集の囂々と騷ぐのを耳にした。併し彼はもう其の群集の間に交つて、主人の災厄に赴く心は起らなかつた。彼は其の群集の聲を聞いて、自ら意識しない壓迫を感じた。彼は酷く自分の哀れな悲慘な姿に泣きたくなつた。

おつぎは後れて漸く垣根の入口に立つた。おつぎはもう自分の家が無いことを知つた。貧窮な生活の間から數年來漸く蓄へた衣類の數點が、既に其の一片をも止めないことを知つて、さうして心に悲しんだ。汗がびつしりと髪の生際を浸して疲憊した身體を、おつぎは少時惘然と庭に立てた。

おつぎはそれから泣いて居る與吉と、死骸の如く横たはつて居る卯平とを見た。おつぎは萬能を置いて、與吉の火傷した頭部をそつと抱いた。與吉は復涙がこみあげて、咽びながらしみじみと悲しげに泣いた。其の聲は聞くものを只泣きたくさせた。疲れたおつぎの目にはふつと涙が泛んだ。おつぎは又手で抑へた卯平の頭部に疑の目を注いで、二人の悲しむべき記念におもひ至つた。おつぎは其の原因を追求して聞かうとはしなかつた。おつぎはしみじみと與吉を心に勦つて、更に、

「爺。」と卯平の蓆に近づいてそつと膝をついた。今おつぎの心裏には何の理窟もなかつた。只しみじみと悲しい痛はしい心からの言葉が、自然に其の口から出るのであつた。おつぎはまだ燃えてゐる火を忘れたやうに卯平を越えて覗いた。卯平はおつぎの聲が耳に入つたので、後ろを向かうとして僅かに目を開いた。地を掠めて走る埃が彼の頰を打つて、彼の横たへた身體を越えた。彼は直に以前の如く目を閉ぢた。

「爺も火傷したのか。」おつぎは靜かにいつて、卯平の手をそつと退けて、左の横頰に印した火傷を見た。

「痛てえか、それでもたいしたこともねえから心配すんなよ。」

おつぎは火に薙ぎ拂はれた穢い卯平の白髪へそつと手を當てた。涙は卯平の白髪に滴つた。

夜に成つてから、近所の者の手で卯平は念佛寮へ運ばれた。勘次は卯平をのせた荷車を曳いた。彼はそれから隣の主人の前へ挨拶に出たが、自分の喉の底で物をいうて、逃げるやうに歸つた。其の夜は凍つた空を戴いて、三人は燒け跡の火氣を賴りに明かした。勘次は失火に就いて、與吉の言葉からは要領を得なかつた。併しながら、彼が悲憤の餘り與吉をさいなまうとする心もさすがに火傷の痛さに泣いて止まぬのに抑へられた。

勘次は疲れた。（土）

二〇　柑子の木

（一）　柑子の木

神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、或山里に尋ね入ることを侍りしに、遙なる苔の細道を踏み分けて心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるゝ筧の雫ならでは、露おとなふものなし。閼伽棚に菊・紅葉など折散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、彼方の庭に大きなる柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしく圍ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばとおぼえしか。

（二）　同じ心ならむ人

同じ心ならむ人と、しめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなきことも、うらなくいひ慰まむこそ嬉しかるべきに、さる人あるまじければ、つゆ違はざらむと對ひゐたらむは、ひとりある心ちやせむ。互に言はむほどのことをば、げにと聞くかひあるものから、聊違ふ所もあらむ人こそ、「我はさやは思ふ」など爭ひにくみ、「さるからさぞ」とも打語らはば、つれづれ慰まめと思へど、

柑子の木（徒然草繪抄）

げにはすこしかこつ方も、我と等しからざらむ人は、大方のよしなしごといはむほどこそあらめ、まめやかなる心の友には、遙に隔りたるところのありぬべきぞわびしきや。

（三）虚言

世に語り傳ふること、まことはあいなきにや、多くは虚言なり。あるにも過ぎて人は物をいひなすに、まして年月過ぎ、境も隔たりぬれば、いひたきまゝに語りなして、筆にも書きとどめぬればやがて定まりぬ。道々の物の上手のいみじきことなど、かたくなる人のその道知らぬは、そぞろに神

の如くにいへども、道知れる人は更に信も起さず。

音に聞くと、見る時とは、何事も變るものなり。かつ顯るるも顧みず、口に任せていひちらすは、やがて浮きたることと聞ゆ。又我もまことしからずは思ひながら、人のいひしまゝに、鼻のほどおごめきていふは、その人の虚言にはあらず、げに〳〵しく所所うちおぼめき、よく知らぬよしして、さりながら、つまづま合せて語る虚言は恐ろしきことなり。わがため、面目あるやうにいはれぬる虚言は、人いたくあらがはず。皆人の興ずる虚言は、一人「さもなかりしものを」といはむもせんなくて聞きゐたるほどに、證人にさへなされて、いとど定まりぬべし。とにもかくにも、虚言多き世なり。ただ常にある珍しからぬことのまゝに心得たらむ、よろづ違ふべからず。

（四）

僞りても賢を學べ

人の心すなほならねば、僞なきにしもあらず。されど、おのづから正直の人などかなからむ。己すなほならねど、人の賢を見て羨むは世の常なり。至りて愚なる人は、偶〻賢なる人を見て之を惡む。「大きなる利を得むが爲に、少しきの利を受けず、僞り飾りて名を立てむとす」と謗る。己が心に違へるによりてこの嘲をなすにて知りぬ、この人は下愚の性移るべからず。狂人のまねとて大路を走らば卽ち狂人なり。惡人のまねとて人を殺さば惡人なり。驥を學ぶは驥の類、舜を學ぶは舜の徒なり。僞りても賢を學ばむを賢といふべし。

吉田兼好

（五）能をつかむとする人

能をつかむとする人、よくせざらむ程は、なまじひに人に知られじ、内によく習ひ得てさし出でたらむこそ、いと心にくからめと常にいふめれど、かくいふ人、一藝も習ひ得ることなし。未だ堅固かたほなるより、上手の中に交りて、謗り笑はるゝにも恥ぢず、つれなく過ぎてたしなむ人、天性その骨なけれども道になづまず、漫りにせずして年を送れば、堪能のたしなまざるよりは、終に上手の位に至り、德たけ、人に許されて、ならびなき名を得ることなり。天下の物の上手と雖も、初は不堪の聞えもあり、無下の瑕瑾もありき。されども、その人、道の掟正しく、これを重くして放埒せざれば、世の博士にて萬人の師となること、諸道かはるべからず。

（六）一道にたづさはる人

一道にたづさはる人、あらぬ道の席に臨みて、「あはれ、我が道ならましかば、かくよそに見侍らじものを」といひ、心にも思へることと常のことなれど、よにわろくおぼゆるなり。知らぬ道の羨ましくおぼえば、「あら羨まし。などか習はざりけむ」といひてありなむ。

我が智を取り出でて、人と爭ふは、角あるものの角を傾け、牙あるものの牙をかみ出す類なり。人として善に誇らず、物と爭はざるを德とす。他にまさることのあるは、大いなる失なり。品の高きにても、才藝のすぐれたるにても、先祖の譽にても、人にまされりと思へる人は、たとひ、言葉に出してこそいはねども、内心に若干の科あり。慎みて之を忘るべし。をこにも見え、人にもいひけたれ、禍をも招くは、ただこの慢心なり。一道にも誠に長じぬる人は、自ら明かにその非を知る故に、志常に滿たずして、終に物に誇ることなし。（つれづれ草）

つれづれ草　吉田兼好の作。作者の見聞感想等を書き綴つた隨筆集。

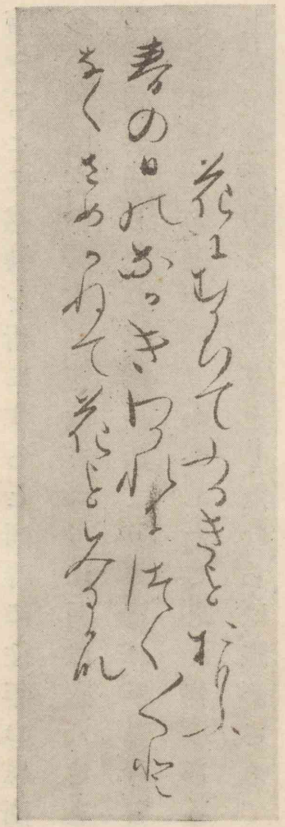
新村出　靜岡縣の人、明治七年生、言語學者。京都帝國大學教授、文學博士。

二　徒然草につきて

新村出

徒然草は私が少時から愛誦した書物の一つで、今なほこれを讀むごとに感興を新にすると同時に往年の思出に耽ることが多い。國文の讀本で「花はさかりに月は隈なきをのみ」とあるあの名句を誦したのが抑〻の始まりで、それから今日に至るまで、折にふれてこの書を繰りかへしたことが何度あるだらう。法然上人が念佛中ゐねむりをしたならば、眼がさめて後再び念佛すればそれでよいのだと人に說きさとされたとある一條を、かの書から抄錄して、その頃心學道話めいたことを好んでゐた鄕里の老父のもとに送つたことなどが、私が徒然草を利用した最初かと記憶してゐる。もう一つおぼえてゐるのは「ふれふれこゆ

き」の童謠を書中から見出して、「雪やこんこ」と興じた遠い遠い幼時を追想してなつかしさに堪へなかつたことである。こんなうぶな教訓や詩趣に感じ入つてゐたのも數へれば、もう二十四五年前になる。



吉田兼好筆蹟

近き頃の聯想を記してみると、第一にをとときには、「内侍所の御鈴の音はめでたく優なるものなり。」と本書にかかれた一節を思ひ浮べずにはゐられなかつたことである。それにひきかへ「諒闇の年ばかりあはれなることあらじ」といふ

筆蹟

花にむかひてふるきをおもふ
春の日のなかき
わかれにつくつ
くとなくさめか
ねて花をみるか
な

上田敏
明治の文學者。靜岡縣の人。文學博士。京都帝國大學教授。大正五年歿。年四十三。

一段で、始めて諒闇といふ文字をおぼえたのも、少年時代この徒然草によつてであつたから、先つころの諒闇のをり、「異樣なるぞゆゝしき」有樣を見るにつけても、屢〻この書物のその節が眼に映じたのであつた。かかる尊きあたりの御事はさておき、國家經濟上の大事たる對外貿易に關しては、兼好法師がいちはやくも「唐のものは藥の外はなくとも事かくまじ、書どもはこの國に多くひろまりぬれば。」と說破して、鎖國論者の先驅となつてゐる、名高いその一條を讀むと、この隨筆の史的價値はよくわかるやうに思ふ。法師が八つになつた年、佛はどんなものかと父に尋ねたとある卷末の問答は、妙味ある言葉として何人も均しく嘆稱する所であるが、曾て上田敏さんは、その伊曾保物語考に於て、意表なところにうまくあの話を活用したことがある。

私が京都に移つてから、鯉のあつものに舌をうつ機は度重な

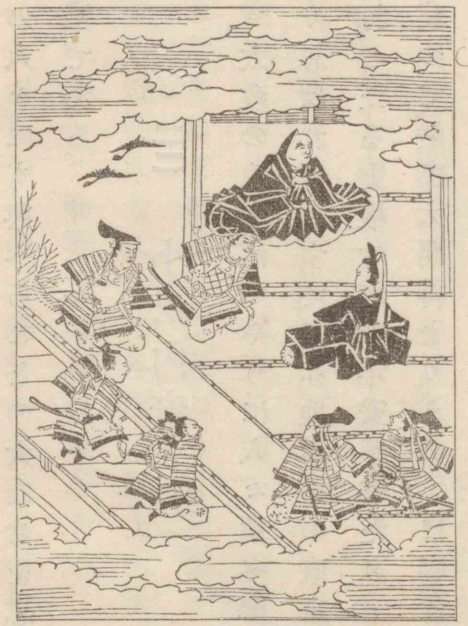
つても、東國にてもてはやす堅魚といふ魚を口にすることの少いのを嘆じつゝ、いよ〳〵徒然草の或ふしぶしに興味を感ずることが深くなつて來た。更に進んでは、京都言葉の變遷をたどるにつけ、關東武士の性行をあげつらふにつけ、この隨筆から拾ひえられる材料のなかなか豐富であることに、益〻氣がついて來た。松下禪尼の古い訓言はもとより、平家物語の作者、梁塵祕抄の鄙曲のことなど、人口に膾炙する得がたき史料が、同じくこれに含まれてゐるのは、私の今さら指摘するまでもない所である。つい近頃にも入宋の沙門道眼上人の事歴はもう少しわからぬものかと、この書をひろげながら一二の佛教史家と話し合うたことがあつた位で、隱れたる史實の散見してゐるものが少からぬのは、徒然草の價値をして多からしめるものと言へよう。

徒然草の文學史上の價値などは、茲に更めて絮說するの要はない。現に私などの精神生活・研究生活の上に少からぬ交渉をもつてゐるのが何よりの價値だ。詩趣、史興、さては教訓を現代の人々にも與へることの大なるを思へば、眞に本書の價値は不滅である。（南蠻更紗）

三　小松内府（一）

太政の入道はかやうに人々數多縛め置きても、なほ心ゆかずや思はれけん、すでに赤地の錦の直垂に、黑絲縅の腹卷の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜のついでに靈夢を蒙つて、嚴島大明神よりうつゝに賜はられたりける銀の蛭卷したる小長刀、常の枕を放たず立てられたりしを脇に挾み、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゝしうぞ見えし。「貞能。」と召す。

筑後守貞能は木蘭地の直垂に緋縅の鎧着て、御前に畏まつてぞ候ひける。入道宣ひけるは、「いかに貞能、このことといかゞ思ふぞ。保元に平右馬助をはじめとして、一門半ば過ぎて新院の御方に參りにき。一宮の御事は故刑部卿の殿の養君にてましましいかば旁見放ち參らせ難かりしかども、故院の御遺誡に任せて、御方にて先をかけたりき。これ一つのたりき。



重盛教訓　（繪入平家物語）

奉公。次に平治元年十二月、信頼、義朝が謀叛の時、院内を取り奉つて大内に立籠り、天下暗闇となつたりしにも、入道隨分身を捨

てゝ兇徒を追落し、經宗、惟方をめし縛めしに至るまで、君の御爲にすでに命を失はんとすることたび〳〵に及ぶ。されば人何と申すとも、いかでかこの一門をば七代までは思し召し棄てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづらもの、西光と申す下賤の不當人が申すことに君のつかせ給ひて、動もすればこの一門滅さるべき由の御結構こそ然るべからね。この後も讒奏するものあらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎭めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ移し參らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし參らせんと思ふはいかに。その儀ならば、定めて北面のものどもが中より、矢をも一つ射んずらん。その用意せよと侍どもに觸るべし。大方は入道、院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍おかせよ。着脊長取出せ。とこそ宣ひけれ。

主馬の判官盛國急ぎ小松殿へ馳參つて、「世は早かう候」と申しければ、大臣聞きもあへ給はず、嗚呼、はや成親の卿の首の刎ねられたんな」と宣へば、その儀にては候はねども、入道殿の御着脊長を召されて候ふ上は、侍どもうち立ちたる御所法住寺殿へ寄せんとこそ出立ち候ひつれ。暫く世を鎭めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし參らせうとは候へども、内々は鎭西の方へ流し參らせんとこそ議せられ候ひつれ」と申しければ、大臣、何によつてたゞ今さることのおはすべきとは思はれけれども、げさの禪門の氣色、さるもの狂ほしきこともやおはすらんとて、急ぎ車を飛ばせて、西八條殿へぞおはしける。

門前にて車より下り、門の内へさし入りて見給ふに、入道腹卷を着給ふ上、一門の卿相雲客數十人、各いろ〳〵の直垂に思ひ思ひの鎧着て、中門の廊に二行に着せられたり。その外諸國の受領・衞府・諸司などは緣にゐこぼれ、庭にもひしと並みゐたり。旗竿など引きそばめ引きそばめ、馬の腹帶を固め、冑の緒を締め、ただ今皆うち立たんずる氣色どもなるに、小松殿烏帽子直垂に大紋の指貫のそば取つて、さやめき入り給へば、殊の外にぞ見えられける。

入道伏目になつて、あはれ例の内府が世をへうずるさまにふるまふものかな。大きに諫めばやと思はれけれども、さすが子ながらも、内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を亂らず、禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹卷を着て向はんこと、さすが面はゆう恥づかしうや思はれけん、障子

平重盛

五戒　佛教で不殺生、不偸盜、不邪淫、不妄語、不飲酒の五つの戒を云ふ。

五常　儒教でいふ仁義禮智信。

を少し引立て、腹卷の上に素絹の衣を、あわて着に着給ひたりけるが、胸板の金物の少し外れて見えけるを隱さうと、頻りに衣の胸を引違へ引違へぞし給ひける。大臣は舍弟宗盛の卿の座上に着き給ふ。入道宣ひ出さるゝこともなく、大臣もまた申し上げらるゝ旨もなし。

(二)

稍あつて入道宣ひけるは、「あの成親の卿が謀叛はことの數にも候はず、一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎭めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし參らせんと思ふはいかに。」と宣へば、大臣聞きもあへ給はず、はら〳〵とぞ泣かれける。入道、「さていかにやいかに。」とあきれ給へば、稍あつて大臣涙をおさへて、「この仰せ承り候に、御運ははや末になりぬと覺え候。人の運命の傾かんとては、必ず惡事を思ひ立ち候なり。また御有樣を見參らせ候に、更に現とも覺え候はず。さすが我が朝は邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫國の主として、天兒屋根尊の御末、朝の政を掌らせ給ひしよりこの方、太政大臣の官に至る人の甲冑をよろふこと、禮儀を背くにあらずや。就中御出家の御身なり。法衣を脫捨てて忽ちに甲冑をよろひ、弓箭を帶しましまさんこと、內には破戒無慙の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にも背き候ひなんず。かたがた恐ある申し事にて候へども、心の底に旨趣を殘すべきにも候はず。

まづ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩これなり。その中に最も重きは朝恩なり。普天の下王地にあらずといふことなし。されば、かの潁川の水に耳を洗ひ、首陽山に蕨

普天の下
普天之下、莫レ非二王土一云々（詩經）
潁川
支那堯の代の隱士許由の故事。
首陽山に
伯夷叔齊の故事

を折りし賢人も、勅命の背き難き禮儀をば存知すとこそ承れ。いかに況や、先祖にも未だ聞かざりし太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才愚暗の身を以て蓮府、槐門の位に至る。加之、國郡半ばは一門の所領となつて、田園悉く一家の進止たり。これ希代の朝恩にあらずや。今これ等の莫大の御恩を思し召し忘れさせ給ひて、みだりがはしく法皇を傾け參らせ給はんこと、天照大神・正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなんず。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。この一門が代々の朝敵を平げて、四海の逆浪を鎭めしことは無雙の忠なれども、その賞に誇ることは傍若無人とも申しつべし。然れども當家の運命未だ盡きざるによつて、事すでに露はれ候ひぬ。その上仰せあはせらるゝ成親の卿を召置かれぬる上は、たとひ君いかなる不思議を思し召し立たせ給ふとも、何の恐か候べき。所當

千顆萬顆の玉　和漢朗詠集に菅三品の「瑩レ日瑩レ風、高價千顆萬顆之玉、染レ枝染レ波、表裏一入再入之紅」の句よりとる。

の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈〻奉公の忠勤をつくし、民の爲には益〻撫育の哀憐を致させ給はば、神明の加護にあづかつて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明・佛陀感應あらば、君も思し召し直すことなどか候はざるべき。

これは尤も君の御理にて候へば、かなはざらんまでも、院中を守護し參らせ候べし。その故は、重盛はじめ敍爵より今大臣の大將に至るまで、しかしながら君の御恩ならずといふことなし。その恩の重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を案ずるに、一入再入の紅にもなほ過ぎたらん。然らば院中に參り籠り候べし。悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷盧八萬の嶺よりもなほ高き父の恩忽ちに忘れんとす。痛ましきかな、不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲には

すでに不忠の逆臣ともなりぬべし。進退これ谷まれり。是非いかにも辨へ難し。申し受くる所詮は、ただ重盛が首を召されぬべし。その故は、院參の御供をも仕るべからず、また院中をも守護し參らすべからず。

富貴といひ、榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、旁〻極めさせ給ひぬれば、御運の盡きんこと難かるべきにあらず。富貴の家には祿位重疊せり。再び實なる木は、その根必ず傷むと見えて候。心細くこそ候へ。いつまでか命生きて亂れん世をも見候べき。ただ末代に生を享けて、かゝる憂目に逢ひ候重盛が果報のほどこそ拙う候へ。ただ今も侍一人に仰せ付けられ、御壺の中へ引出されて、重盛が頭を刎ねられんことは、いと易いほどの御事にこそ候はんずらめ。これを各聞き給へ。とて、直衣の袖も絞るばかりにかき口説き、さめざめと泣き給へば、その座に並みゐ給へる平家一門の人々、皆袖をぞ濡されける。

入道、頼みきつたる內府のかやうに宣へば、世にも力なげにて、「いや〳〵、それまでのことは思ひも寄り候はず。惡黨どもの申すことに君のつかせ給ひて、いかなるひがごとなどもや出で來んずらんと思ふばかりでこそ候へ」。大臣「たとひいかなるひがごと出で來候へばとて、君をば何とかし參らせ給ふべき」とて、つい立つて中門に出で、侍どもに宣ひけるは、「ただ今これにて申しつることどもをば、汝等はよく承らずや。けさよりこれに候ひて、かやうのことどもを申ししづめんとは存じつれども、餘りにひたさわぎに見えつる間、まづ歸りつるなり。院參の御供に於ては、重盛が頭の刎ねられたらんを見て仕れ。されば人參れ」とて、小松殿へぞ歸られける。

その後大臣、主馬の判官盛國を召して、「重盛こそけさより別し

て天下の大事を聞き出したんなれ。われをわれと思はんずるものどもは、物の具して急ぎ參れと催せ」と宣へば、馳せまはつて披露す。おぼろげにては騒ぎ給はぬ人の、かやうの披露のあるは、まことに別の仔細のあるにこそとて、われもわれもと馳せ參る。都の内外にあふれゐたる兵ども、あるは鎧着て未だ冑を着ぬもあり。あるは矢負うて未だ弓を持たぬもあり。片鐙ふむやふまずにて、あわて騒いで馳せ參る。

小松殿に騒ぐことありと聞えしかば、西八條に數千騎ありける兵ども、入道にはかうとも申しも入れず、さやめきつれて、皆小松殿へぞ馳せたりける。弓箭にたづさはるほどのものは一人も殘らず。筑後の守貞能がただ一人候ひけるを、御前へ召して「内府は何と思ひて、これ等をば皆、かやうに呼び取るやらん。けさこれにていひつるやうに、淨海が許へ討手などもや向けんずらん」と宣へば、貞能涙をはらはらと流して、「人も人にこそよらせ給ひ候へ。いかでかただ今さる御事候べき。けさこれにて申させ給ひつる御事どもをば、はや皆御後悔ぞ候らん」と申しければ、入道、内府に中たがうては悪しかりなんとや思はれけん、法皇迎へ參らせんと思はれける心も和ぎ、急ぎ腹卷ぬぎ置き、素絹の衣に袈裟うちかけて、いと心にも起らぬ念誦してこそおはしけれ。（平家物語）

平家物語　作者諸説あつて確證はない。平家の榮華に筆を起して其の滅亡に至る間を記した軍記物語、普通は十二卷。

二三　小野の雪

昔惟喬親王と申す皇子おはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬といふ處に宮ありけり。年毎の櫻の花盛りには、その宮になむおはしましける。その時、右の馬の頭なりける人を常に率ておはしましけり。狩は懇ろにもせで、大和歌にかゝれりけり。

今狩する交野の渚の院の櫻殊におもしろし。その木の下におり居て、枝を折りて挿頭（カザシ）にさして、上中下みな歌を詠みけり、馬の頭なりける人、

1 世の中にたえて櫻のなかりせば、
　春のこゝろはのどけからまし。

となむ讀みたりける。又或人の歌、

2 散ればこそいとど櫻はめでたけれ、
　憂き世になにか久しかるべき。

とて、その木の下は立ちて歸るに、日暮になりぬ。歸りて宮に入らせたまひぬ。夜更くるまで物語して、あるじの皇子入りたまひなむとす。

十一日の月も隱れなむとすれば、かの馬の頭のよめる、

3 あかなくにまだきも月のかくるゝか、

山の端にげて入れずもあらなむ。

かくしつゝまうでつかうまつりけるを、皇子おもひの外に御髪（ぐし）おろさせ給ひて、小野といふ處に住みたまひけり。正月に拜み奉らむとて小野にまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。強ひて御室にまうでて拜み奉るに、つれづれといと物悲しくておはしましければ、やゝ久しく侍ひて、古の事など思ひいで聞えけり。さても侍ひてしがなと思へど、おほやけ事どもありければ、えさぶらはで、夕暮に歸るとて、

渚の院（繪入伊勢物語）

4 忘れては夢かとぞおもふ、思ひきや

伊勢物語　在原業平の歌を中心とした歌物語。

小島烏水　實業家。探勝家。名は久太。明治七年、讃岐高松に生れた。

廣重　江戸時代の浮世繪師初代廣重。姓安藤。通稱德太郎。安政五年九月歿。年六十二。

雪踏みわけて君を見むとは。
とてなむ、泣く泣く來にける。（伊勢物語）

二四　東海道五十三次と廣重

小島烏水

廣重といへば、すぐ東海道と言ひたくなるほど、密接な關係があるのは、東海道は彼が新しい藝術に素材を供給した土地であるからだ。今日は二三の都市を除けば、詩と畫とローマンスの故郷として、吾人に淡い哀愁を與ふるに過ぎないほど、東海道は吾人の生活とは遠いものとなつてゐる。

久しく戰國時代の疲弊をうけてゐた東海道は、織田豐臣時代に、道路も修繕され、橋梁も改築されて、舊觀に復したが德川氏の治世となつて、慶長九年には、諸國の海道一里毎に、塚を築き榎を植ゑて、所謂一里塚を作り、又海道の兩側には、並樹を設けて、風致

を添へ、旅人の休憩に便にした。

廣重の「東海道風景圖會」日本橋の畫に、柳下亭種員が「名城と名山晴れて江戸の春。」の句を題してあるが、この江戸日本橋が全國道程の基點と定められた。

その日本橋を發足點として京都に向ひ、大抵二三里ぐらゐに川や海に沿ひ、又は山に抱かれて、宿驛が五十三ある。この五十三次を定めたのは、「鬼門關外莫」道遠、五十三驛是皇州」といふ山谷の詩に據つたものであるらしい。これらの宿驛も、道路も、寛永年間に諸侯の江戸參勤交替の制が定められて、海道に大名行列が、嚴めしく通行するやうに

安藤廣重（三代目豐國筆）

なつて整頓されたのである。

東海道五十三次の往來は約十日、木曾海道六十九次は、約十二三日の路程であつた。ただ諸藩割據の餘弊は、故らに行路を阻むやうな山間海岸諸所に不便な難所が、横たはつてをり、橋梁を設けぬ川などもあり、要所には關所をしつらへて、嚴重に行人を吟味した。かういふ川は大雨には「川留」の混雜となり、晴れにも旅人は人夫の肩に乘つて渡る外なかつた。若し關所を避けて間道を行けば、關所破りの罪人として、磔刑に處せられた。かうした旅

東海道五十三次・草津（廣重筆）

現時の草津

とは、今日の支那内地の旅行と、異ならぬのであつた。江戸時代になつては、旅舍には、風呂の設備もあつて、旅客は浴衣姿にくつの不便も今日から想像すれば、莫に咲いた花のやうな、一種の美しさを感ぜられぬでもない。

旅人は慶長の初には宿舍の設けがあつても、古代の風を存して、米や、糒を携へて往來し、旅舍は湯を給したり、米を炊ぐ薪を給するのみであつて、木賃の稱呼はこれからはじまつたのである。又夜具蒲團は調へて貸す宿舍もあつたが、多く自分で携へて行つた

ろぎ、按摩に肩を揉ませる樂しみもあつた。

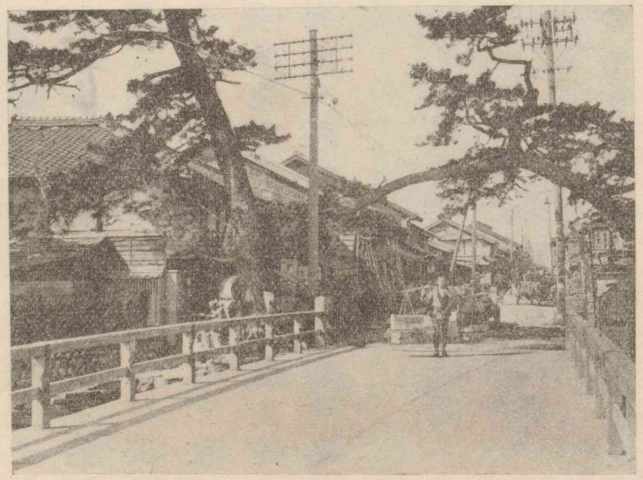
海道には葭簀張の茶屋があつて、名物を鬻いだ。小田原の外、安倍川の安倍川餅、宇都谷峠の十團子、鞠子の宿の薯蕷汁、鳴海の有松絞、桑名の燒蛤、草津の姥が餅、大津の大津繪等は、最も有名であつた。

この繁昌の東海道に着眼して、風景と共に、各地、各階級の風俗を眼のあたりに見るやうに、寫生したものに、廣重の繪畫と一九の道中膝栗毛とがあつた。これ等の作品が、更に東海道に對する民衆

東海道五十三次・濱松（廣重筆）

一般の興味を喚起したことは言ふまでもない。

一九は、江戸時代生活の悅樂を主として書いてゐるが、廣重は寧ろ江戸時代の享樂的な生活の反面に多く眼を向けてゐる。そこで神社・佛院の莊麗典雅や、驛路の繁華旅舍の饗宴等にはうしろを見せて、黃昏に橋上を急ぐ旅人、月影のほのめく並木の間の疲れた金比羅詣、雲助どもの焚火してゐる村外れ、雪にふりこめられてゐる海道の人家と、合羽の雪をうち拂ひ、傘をつぼめて行く旅人の姿などを寫してゐる。その人



現時の濱松

物も旅僧・虚無僧・雲助・飛脚・按摩・旅商・田舎道者・比丘尼・瞽女・六部・金比羅詣・脱け參りの小僧・賣藥商・鹿島の事觸れなどが多く見える。

さうして一九は畢竟機智から來る洒落や、ふざけやに重きを置いてゐるが、廣重は寂しみを持つた東海道の自然に對する、熱愛と、感激を表してゐる。一九の膝栗毛が今日では藝術上の興味・價値を離れて、風俗史料・方言資料として珍重されるに至つてゐるのに、廣重の東海道の作畫には、我々も秋風が枝豆の莢をさらさらと鳴らして吹くやうな、荒涼たる、一種の哀音を聽取することができるのである。

芥川龍之介　東京の人、小説家、昭和二年歿年三十六。

二五　尾形了齋覺え書

（浮世繪と風景畫）

芥川龍之介

今般、當村内にて、切支丹宗門の宗徒共、邪法を行ひ、人目を惑はし候儀に付き、私見聞致し候次第を、逐一公儀へ申上ぐ可き旨、御沙汰相成り候段屹度承知仕り候。

陳者、今年三月七日、當村百姓與作後家篠と申す者、私宅へ參り、同人娘里（當年九歳）大病に付き、檢脈致し呉れ候樣、懇々賴入り候。

右篠と申候は、百姓惣兵衛の三女に有之、十年以前與作方へ緣付き、里を儲け候も、程なく夫に先立たれ、爾後再緣も仕らず機織り乃至賃仕事など致し候うて、その日を糊口し居る者に御座候。なれども、如何なる心得違ひにてか、與作病死の砌より、專ら切支丹宗門に歸依致し、隣村の伴天連ろどりげと申す者方へ、繁々出入致し候間、當村内にても、兎角の批評絶え申さず、依つて、父惣兵衛始め姉弟共一同種々意見仕り候へども泥烏須如來より有難きもの無しなど申し候

うて一向に合點仕らず、朝夕、唯、娘里と共にくるすと稱へ候小き磔柱形の守り本尊を禮拜致し、夫與作の墓參さへ怠り居る始末に付き、唯今にては、親類緣者とも義絕致し居り、追つては、村方にても、村拂ひに行ふ可き旨、寄り寄り評議致し居る由に御座候。

右樣の者に候へば、重々賴み入り候へども、私檢脈の儀は、叶ふまじき由申し聞け候所、一度は泣く泣く歸宅致し候へども、翌八日、再私宅へ參り、「一生の恩に着申す可く候へば、何卒御檢脈下され度し」など申し候うて、如何樣斷り候も、聞き入れ申さず、はては、私宅玄關に泣き伏し、「御醫者樣の御勤は、人の病を癒す事と存じ候。然るに、私娘大病の儀、御聞き棄てに遊ばさるる條何とも心得難く候」など、怨じ候へば、私申し候は、「貴殿の申し條、萬々道理には候へども、私檢脈致さざ

る儀も、全くその理無しとは申し難く候。何故と申し候はば、貴殿平生の行狀誠に面白からず、別して、私始め村方の者の神佛を拜み候を、惡魔外道に憑かれたる所行なりなど、屢〻誹謗致され候由、確と承り居り候。然るに、その正道潔白なる貴殿が、私共天魔に魅入られ候者に、唯今、娘御の大病を癒し呉れよと申され候は、何故に御座候や。右樣の儀は、日頃御信仰の泥烏須如來に御賴みあつて然る可く、もし、たつて私、檢脈を所望致され候上は、切支丹宗門御歸依の儀、以後緊く御無用たる可く候。此段御承引無之に於ては、假令、醫は仁術なりと申し候へども、神佛の冥罰も恐しく候へば、檢脈の儀平に御斷り申候」斯樣說得致し候へば、篠も流石に、推してとも申し難く、其儘すごすご歸宅致し候。

翌九日は、ひき明け方より大雨にて、村内一時は人通も絕

え候所、卯時ばかりに、篠、傘をも差さず、濡鼠の如くなりて、私宅へ參り、又々檢脈致し吳れ候樣、賴み入り候間、私申し候は、「長袖ながら、二言は御座無く候。然れば、娘御の命か、泥烏須如來か、何れか一つ御棄てなさるる分別肝要と存じ候」斯樣申し聞け候へば、篠、此度は狂氣の如く相成り、私前に再三額づき又は手を合せて拜みなど致し候うて、「仰せ千萬御尤もに候。なれども切支丹宗門の敎にて、一度ころび候上は、私魂軀とも、生々世々亡び申す可く候。何卒、私心根を不憫と思召され、此儀のみは御容赦下され度候。」など搔き口說き咽び入り候。邪宗門の宗徒とは申しながら、親心に二無き體相見え、多少とも哀れには存じ候へども、私情を以て、公道を廢す可らざるの道理に候へば、如何樣申し候うても、ころび候上ならでは、檢脈叶難き旨、申し張り候所、篠、何とも申し樣無き顏を致し、少時私顏を見つめ居り候が、突然淚をはらはらと落し、私足下に手をつき候うて、何やら蚊の樣なる聲にて申し候へども、折からの大雨の音にて、確と聞き取れ申さず、再三聞き直し候上、漸く、然らば詮無く候へば、ころび候可き趣、判然致し候。なれどもころび候實證無之候へば、右證明を立つ可き旨、申し聞け候所、篠、無言の儘、懷中より、彼くるすを取り出し、玄關式台上へ差し置き候うて、靜に三度まで踏み候。其節は格別取亂したる氣色も無之、淚も既に乾きし如く思はれ候へども、足下のくるすを眺め候眼の中、何となく熱病人の樣にて、私方下男など皆々氣味惡しく思ひし由に御座候。

扨、私申し條も相立ち候へば、卽刻下男に藥籠を擔はせ大雨の中を、篠同道にて、同人宅へ參り候所、至極手狹なる部屋

に、里獨り、南を枕にして打臥し居り候。尤も身熱烈しく候へば、殆正氣無之體に相見え、いたいけなる手にて繰返し、繰返し、空に十字を描き候うては、頻にはるれやと申す語を、現の如く口走り、其都度嬉しげに、微笑み居り候。右、はるれやと申し候は、切支丹宗門の念佛にて、宗門佛に讃頌を捧ぐる儀に御座候由、篠其節枕邊にて、泣く泣く申し聞かし候。依つて、早速檢脈致し候へば、傷寒の病に紛れ無く、且は手遲れの儀も有之、今日中にも、存命覺束なかる可きやに見立て候間、詮方無く其旨、篠へ申し聞け候所、同人又々狂氣の如く相成り「私ころび候仔細は、娘の命助け度き一念よりに御座候。然るを落命致させては其甲斐、萬が一にも無之かる可く候。何卒泥烏須如來に背き奉り候私心苦しさを御汲み分け下され、娘一命、如何にもして、御取り留め下され度候」と申し、私

のみならず、私下男足下にも、手をつき候うて、頻に賴み入り候へども、人力にては如何とも致し難き儀に候へば、心得違ひ致さざる樣、吳れ吳れも、申し諭し、煎藥三貼差し置き候上、折からの雨止みを幸、立ち歸らんと致し候所、篠、私袂にすがりつき候うて離れ申さず、何やら申さんとする氣色にて、脣を動かし候へども、一言も申し果てざる中に、見る見る面色變り、忽、其場に悶絕致し候。然れば、私大に仰天致し、早速下男共々、介抱仕り候所、漸、正氣づき候へども、早早立上り候氣力も無之、「所詮は、私心淺く候儘、娘一命、泥烏須如來、二つながら失ひしに極まり候。」とて、さめざめと泣き沈み種々申し慰め候へども、一向耳に掛くる體も御座無く、且は娘容態も詮無く相見え候間、止むを得ず再下男召し伴れ、匆々歸宅仕り候。

然るに、其日未時下り、名主塚越彌左衞門殿母儀檢脈に參り候所、篠娘死去致し候由、並に篠、悲歎のあまり、遂に發狂致し候由、彌左衞門殿より承り候。　右に依れば、里落命致し候は、私檢脈後一時の間と相見え、巳の上刻には、篠既に亂心の體にて、娘死體を搔き抱き、聲高に何やら、蠻音の經文讀誦致し居りし由に御座候。　猶、此儀は、彌左衞門殿直に見受けられ候趣にて、村方嘉右衞門殿、藤吾殿、治兵衞殿等も、其場に居合されし由に候へば、千萬實事たるに紛れ無かる可く候。

追つて、翌十日は、朝來小雨有之候へども辰の下刻より春雷を催し稍〻晴れ間相きざし候折から――村鄕士梁瀨金十郎殿より、迎への馬差し遣はされ、檢脈致し吳れ候樣、申し越され候間、早速馬上にて、私宅を立ち出で候所、篠宅の前へ來かかり候へば、村方の人々大勢佇み居り、伴天連よ、切支丹よ

など、罵り交し候うて、馬を進め候事さへ叶ひ申さず、依つて、私馬上より、家內の容子差し覗き候所、篠宅の戶を開け放ち候中に、紅毛人一名、日本人三名、各々法衣めきし黑衣を着し候者共、手に手に彼くるす、乃至は香爐樣の物を差しかざし候うて、同音に、はるれや、はるれやと唱へ居り候。　加之、右紅毛人の足下には篠、髮亂し候儘、娘里を搔き抱き候うて、失神致し候如く、蹲り居り候。　別して、私眼を驚かし候は、里、兩手にてひしと、篠頸を抱き居り、母の名とはるれやと、代る代る、あどけ無き聲にて、唱へ居りし事に御座候。　尤も、遠眼の事とて、確とは辨へ難く候へども、里血色至極麗しき樣に相見え、折々母の頸より手を離し候うて、香爐樣の物より立ち昇り候煙を捉へんとする眞似など致し居り候。　然れば、私馬より下り、里蘇生致し候次第に付きて、村方の人々に委細相

尋ね候へば、右紅毛の伴天連ろどりげ儀、今朝、伊留滿共相從へ、隣村より篠宅へ參り、同人懺悔聞き屆け候上、一同宗門佛に加持致し、或は異香を焚き薫らし、或は神水を振り濺ぎなど致し候所、篠の亂心は自ら靜まり、里も程無く蘇生致し候由、皆々恐しげに申し聞かせ候。古來一旦落命致し候上、蘇生仕り候類、元より少からずとは申し候へども、多くは、酒毒に中り、乃至は瘴氣に觸れ候者のみに有之、里の如く、傷寒の病にて死去致し候者の、還魂仕り候例は、未嘗て承り及ばざる所に御座候へば、切支丹宗門の邪法たる儀此一事にても分明致す可く、別して伴天連當村へ參り候節、春雷頻に震ひ候も、天の彼を惡ませ給ふ所かと推察仕り候。

猶、篠及娘里當日伴天通ろどりげ同道にて、隣村へ引移り候次第、並に慈元寺住職日寛殿計らひにて同人宅燒き棄て

候次第は、既に名主塚越彌左衛門殿より、言上仕り候へば、私見聞致し候仔細は、荒々右にて相盡き申す可く候。但、萬一記し洩れも有之候節は、後日再應書面を以て言上仕る可く、先は私覺え書斯くの如くに御座候。以上。

申年三月二十六日

伊豫國宇和郡――村

醫師　尾形了齋

（芥川龍之介全集）

新制大日本讀本　卷八終

昭和六年六月十三日　初版印刷
昭和六年六月十六日　初版發行
昭和六年十一月二日　訂正再版印刷
昭和六年十一月七日　訂正再版發行

新制大日本讀本
奥附

定價	
自卷一至卷四	金六拾參錢
自卷五至卷十	金五拾八錢

著作者　藤村作

發行兼印刷者　東京市京橋區銀座一丁目五番地
代表者專務取締役　大日本圖書株式會社
杉山常次郎

東京市京橋區銀座一丁目五番地
發行所　大日本圖書株式會社
振替口座東京二一九番

不許複製

東京・株式會社秀英舍印刷

夏目漱石

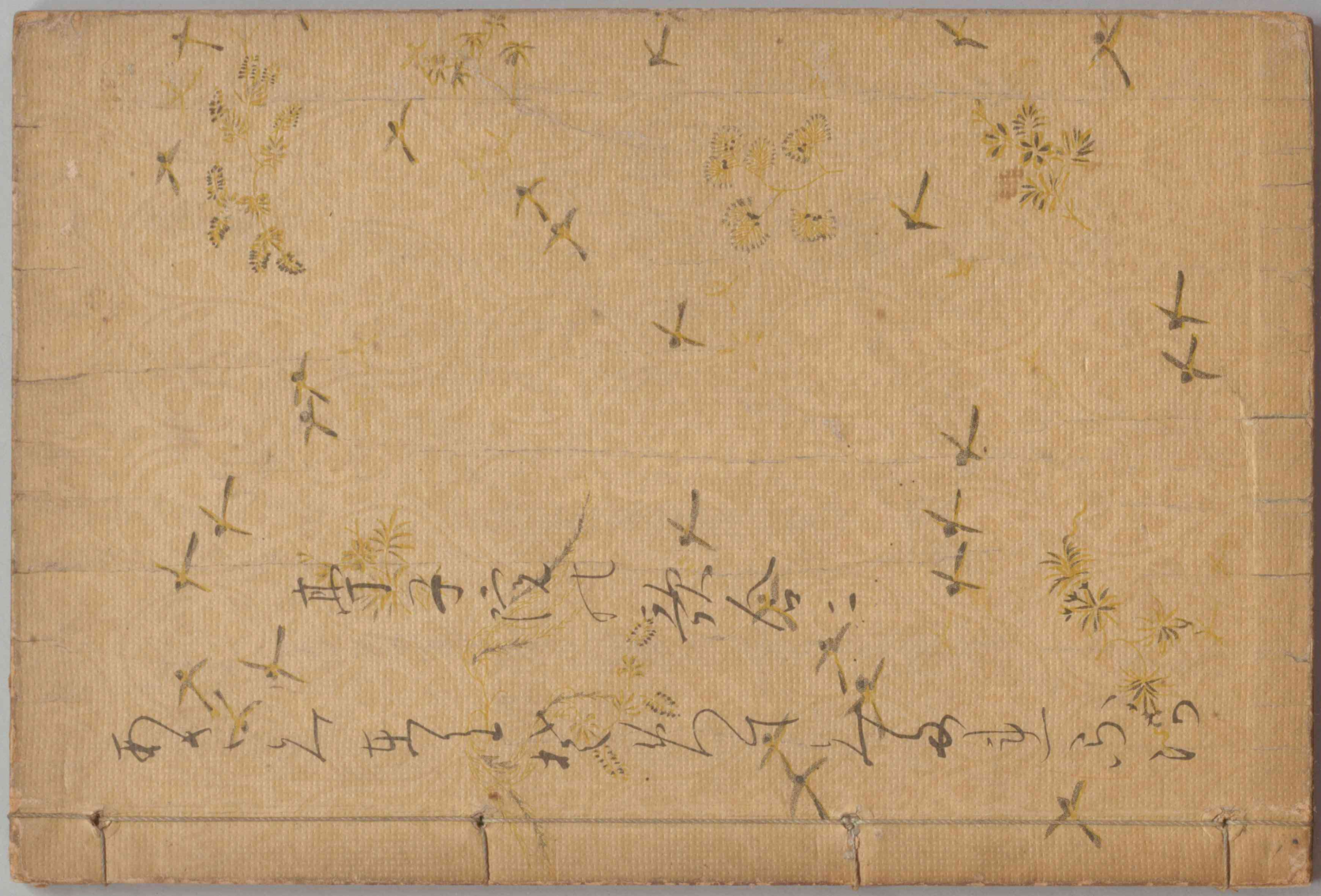
吉野里

哀

擁護之

大阪天王寺区府立高津中学校

廣島縣呉市吉浦町東浜下町一四一七

浦島太郎

小田博章